マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦歿者遺族会）
〒103　東京都中央区
日本橋人形町1－8－2
電話 03－661－8760
振替口座東京0-93487番
編集兼発行人　佐藤宗丕
年2回（1月・7月）発行

昭和六十三年
慰霊祭・総会・直会

秋本英郎

一、慰霊祭

昭和六十三年二月十四日（日）、この日は雲一つなく澄みわたった大空で、やや強い北風の中を「今後は毎年二月の第二日曜日に慰霊祭を行なう」との申し合わせにより、慰霊祭、総会が実施された。

午前八時、役員の皆さんが受付の表示を出したり、会旗を参集所玄関に掲出したり、総会次第を張り出したり用意を始める。午前八時過ぎには役員一同が慣れた手順で受付、旅行、頒布品の七つの窓口を担当する。会員の皆さんは、それぞれ顔見知りを求めて集まり、お互いの無事を喜びあい、一年一度のこの日を和やかに語り合っている。

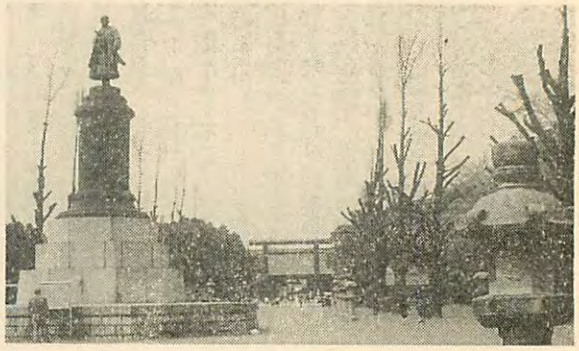
昨年十二月にクェゼリンのチャップマン司令官から贈られたクェゼリンとルオットの慰霊碑の写真が飾られて人目をひいている。

午前九時五十分、遺品奉納式。別室に揃えられた三司令官の遺品を松平宮司様に御検分頂いてから一同の見守る中で先ず、クェゼリンの秋山司令官の嫡孫　武様が「祖父の遺品を奉納します」と述べ遺品目録を宮司様へ、次にタラワの柴崎司令官の四男　晃様が、そしてルオットの山田司令官の長女　雪子様不参のため佐藤会長が代理して奉納し、宮司様から「御祭神の貴重な御遺品故、長く大切にお預かりします」と御挨拶があった。ついで宮司様から「私は宮司であり又本会の会員でもある」と本会との関係を話され今日始め

昇殿参拝の後遊就館前で（63. 2. 14）

目次

慰霊祭・総会……秋本　英郎……1
会との御縁由来記　篤志会員　松平　永芳……4
慰霊祭に出席して　……山下　タエ……4
スポーツマンで庶民的な　朝香宮殿下……野村　盛弘……5
K・S・ウイリアムス氏のこと　篤志会員　土屋　太郎……7
南溟の護り……山口　裕子……8
私の場合……高橋とし子……9
激戦二十年後の戦跡(1)　篤志会員　長谷川　敏……10
二十年祭の想いで　……高林　セキ……11
忘れられぬ日……石谷　典夫……12
南の島を想う……中村　久……12
戦地からの便り……高橋　鎮夫……13
南十字星……岡野　正文……14
新春に……星野　綾子……15
お便りの中から……田賀　将一・安福　道明　山下　良輝・井上　義夫　藤田　清瀬・北原　ひで　斎藤耕太郎・川上ミサオ　江村　源次・和田　和子　島袋　ヒデ・金崎　キン　国松ふみ江・園山　和子……15
慰霊碑（副碑）の台座奉納……20
マーシャル諸島情報……21
寄付者芳名……21
靖国神社のみたままつり……22
マイロン中田夫妻との再会……23
現地慰霊を希望する方々へ……23
本部だより……24



て参加された大給湛子（オギュウキヨコ）様（朝香宮正彦王殿下の御令妹、湛子女王殿下）を御紹介された。

午前十時五分、一同列を正し御手水で心身を清め昇殿。今年も亦御本殿解体修理中のため仮本殿で行なわれる。

修祓、献饌、祭主祝詞奏上。参列の会員は頭を深く垂れて四十幾星霜彼方の亡き肉親の面影を思い浮べ、その忘れ難い想いに胸が溢れんばかり。耳を澄ませば遙か南溟の潮騒が聞こえて来るような。次いで玉串奉奠、佐藤会長、大給湛子様に続き母代表に安井文子様（東京）、妻代表に松木孝子様（宮城）、兄弟姉妹代表に橋口昭利様（東京）、子代表に安福道明様（兵庫）、孫代表に秋山武様（香川）が神前に玉串を捧げられた。終わりに二礼、二拍手、一拝。神官の終了の辞をうけて午前十時五十八分、お神酒、神饌を頂き一同静かに退下した。

本日の昇殿者は佐藤会長以下百八十六名であった。直ちに遊就館前で、松平宮司様、大給湛子様を中心に記念撮影をし、再び参集所に入り昭和六十三年度定例総会を開催した。

二、総　会

司会は高橋幹事、議長は黒川幹事が担当する。

佐藤会長から挨拶に続いて昨年の経過の大要を報告し、昼間常任幹事から別表の決算報告、柴崎監事から監査結果が報告され、一括可決承認した。次に会長は、秋本英郎委員を会員の同意を得て幹事に指名した（任期は翌年の総会まで）。

会務計画については

一、会員の要望に従い会員名簿と会の記録を刊行し、会費納入済の方に送る。登載する人名は当初の計画を緩めて連絡のとれている範囲とする。

二、靖国神社の遊就館に奉納してあるクェゼリンの碑の副碑に台座を作り追加奉納する。クェゼリン、ルオット、タラワ等の慰霊碑の写真を神社に奉納する。

三、本会が保有している霊砂の約半分を国立千鳥ガ渕墓苑に納め、霊砂を希望する方に頒けて下さるよう依頼する。

四、厚生省の計画による本年度の現地慰霊に参加を希望する方の要望を同省に取り次ぐ。

と説明。その予算は別表のとおりと提案し、異議なく承認された。続いて会長は、遺族が別れて住んでいる時、その家族が別々に会費を払って会員になることを歓迎する。慰霊祭にご家族、縁者が大勢参加されることはありがたい、と述べた。更に参考として、八月十五日の全国戦没者追悼式と、秋に沖縄で行なわれる東京都主催の追悼式に参列を希望する方を尋ねた。終わりに長崎県佐世保の井上様が、戦時中現地で病気のため内地に送還され、幾多の苦難を乗り越えられて、亡き戦友を想う心情を切々と訴えられた。議事のすべてを終え、格別の意見や質問もないところで明年の再会を約して散会した。時に午前十一時四十五分。

参集所で

三、直会旅行

直会旅行に参加の会長以下五十四名はバス内で昼食をとり、午後一時、出発した。車中で添乗員とガイドの懇切な案内、説明を受け車は一路、山梨県石和へと向かった。車は上等、道路事情は極めて良好、午後二時四十分には早くも石和グランドホテルに到着。ゆっくり温泉につかって午後六時から待望の宴会。それぞれ民謡あり、詩吟あり、又恒例のマーシャル歌謡「あの椰子の島」、当地ゆかりの武田節を全員で合唱した。

翌日はゆっくりして午前十時出発。宝石博物館を見学。即売所でそれぞれにネックレス、ブローチ等の土産物を購入した。昼少し前に武田信玄公をまつる武田神社に参拝、NHKドラマの影響もあって月曜というのに大変な人出におどろかされた。次いで近くの護国会館で、永平寺風の精進料理で昼食。一品々々の説明あり、そのまろやかな風味を楽しんだ。次に車は信玄公の菩提寺恵林寺に向かい名僧夢窓国師築庭といわれる日本庭園を見学。後、中央高速に入り一路東京へ、午後五時過ぎ東京駅着。

今年の直会旅行はコース、宿の選定が良く又、天候に恵まれ更に交通公社の秋元添乗員のサービスぶりが印象に

第24期決算報告書（自昭和62年1月1日 至昭和62年12月31日）

マーシャル方面遺族会

1 一般会計収支計算書

＜収入の部＞

科目	金額
前期より繰越	1,432,288
会費（過年度分）	123,000
会費（当年度分）	1,224,000
寄附金等	2,698,700
受取利息	324,166
雑収入	30,500
（小計）	(4,400,366)
合計	5,832,654

＜支出の部＞

科目	金額
慰霊費	1,002,938
運営費	394,460
刊行費	575,083
印刷費	13,460
通信費	157,655
事務用品費	9,380
会議費	137,202
振替払込料	31,790
公租公課	64,818
（小計）	(2,386,786)
次期へ繰越	3,445,868
合計	5,832,654

2 一般会計財産目録（昭和62年12月31日現在）

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
普通預金	197,476	前受会費（63年度分以降）	910,000
金銭信託	417,734	仮受金	35,068
中期国債	2,179,976		
通知預金	1,595,750		
		（小計）	(945,068)
		次期へ繰越	3,445,868
合計	4,390,936	合計	4,390,936

3 特別会計 （現地慰霊碑維持基金勘定報告）

収入の部		支出の部	
前期より繰越	7,500,000	次期へ繰越	7,500,000
合計	7,500,000	合計	7,500,000

（注） 定額預金並びに貸付信託として保管

昭和63年2月14日

監査の結果上記の報告は適正且つ正確であることを認めます。

監事 高橋鎮夫
〃 柴崎晃

マーシャル方面遺族会
会長 佐藤宗丕

第25期一般会計予算

（自 昭和63年1月1日
至 昭和63年12月31日）

＜収入の部＞

科目	金額
前期より繰越	3,445,868
会費	1,300,000
寄附金等	1,700,000
受取利息	300,000
雑収入	30,000
（小計）	(3,330,000)
合計	6,775,868

＜支出の部＞

科目	金額
慰霊費	1,200,000
運営費	400,000
刊行費	650,000
印刷費	20,000
通信費	200,000
事務用品費	20,000
会議費	140,000
振替払込料	30,000
公租公課	70,000
雑費	20,000
予備費	50,000
名簿刊行費	1,200,000
次期へ繰越	2,775,868
合計	6,775,868

直会 （63. 2. 14 石和）

残った、とは某役員の後日談。
〔幾十の 星霜過ぎて なお想う
亡き面影は いや若くして〕

会との御縁由来記

篤志会員　松平永芳

昭和三十八年六月、クェゼリン遺族会として発足した現マーシャル方面遺族会が、本年早くも二十五周年を迎へると伺ひ洵に感慨無量であり、改めて浮田前会長、佐藤現会長を始めとする御世話役各位の献身的御活躍に対し、最高の敬意を表する次第であります。

私は、或機会から御縁を得、篤志会員として微力ながら、先には防衛庁戦史室勤務員として御協力し、今日では靖国神社宮司たる立場に在つて折に触れ御力添へ出来ますことは、偶然のめぐり合はせ、宿命とは申せ、クェゼリン島を始め、マーシャル方面の各離島に於て孤軍敢闘の上散華された御祭神とそれ等御縁故の方々に対し、死処を得ずして今日に生きる己れの心が多少なりとも休まる思ひであります。

宿命とは洵に不思議なもので、マーシャル方面の作戦には全く関与しなかつた私が、篤志会員として名を連ねさせて頂いて居りますのは、実に音羽侯をよく存じ上げて居たからであり、その間柄の生じましたのは更に遡つて、侯の御母宮と私の亡母との御縁からのことであります。

亡母幸子は、明治二十四年、忠臣義貞公直系の末裔である新田家に生を享け、音羽侯の御母君、即ち朝香宮鳩彦王殿下（陸軍大将、明治二十年～昭和五十六年）の妃の宮允子内親王（富美宮、明治天皇第八皇女、明治二十四年～昭和八年）とは同い年で、娘時代屢々参殿して御遊び御相手役をつとめさせて頂いた身の上、従つて私は、海軍に入る前の未だ朝香宮正彦王殿下当時の侯や兄宮孚彦王、御従兄の北白川宮永久王殿下（御祭神）方と福島県の雪深き山小屋で御一諸に過ごしたり、任官後は同艦、同戦隊の勤務の機会はありませんでしたが、泊地で突然私の乗組駆逐艦「朧」を訪ねて来られる等、折々御目にかかって居りました。

話は一転し、昭和三十一年以来七ヶ年程の間、私は制服自衛官の身で防衛庁戦史室に勤務して居りました砌り、公務の余暇を利用して、わがライフ・ワークとも言ふべき作業を成し遂げました。それは、海軍に身を投じて戦歿された、皇族・華族・学習院出身者（「水桜会」と呼称した会）の各々方の家系、軍歴、特に戦歿状況を出来る限り克明に調査して一書に纒め上げて、御遺族、御縁故者に贈呈申し上げる作業に力を注いだと言ふ事であります。

（註記―「櫻華餘芳」と題する、写真、附図等多数掲載の三百九十六頁の本）

私は右作業の手始めに、音羽侯爵の御記録を作成し、これを印刷の上、内容見本として発刊趣意書に添へて、生き残り会員や縁故者に配布して出版費拠出の御援助を乞ふたのであります。

当時の私は、戦史室の軍事図書、史資料等の収集、保管担当の責任者と言ふ立場上、連合国側、特に米海兵隊、米陸・海・空軍刊行の公刊戦史書を何時でも自由に読み調べることが出来ましたので、これ等を利用して、昭和三十年代には玉砕地の状況が未だ一般には殆んど不明であつたにも拘らず、クェゼリン島玉砕戦の状況を、当時としては相当詳述することが出来た次第であります。

既に四分の一世紀を経た今日、記憶も薄れて定かでありませんが、この音羽侯の御記録を浮田会長に差し上げたのが、篤志会員に推された端緒であつた様に覚へて居ります。省みて、この一駒の行為が元となつて会との御縁が出来、多少なりとも皆様方の御役に立つたのであれば、死処を得ずして今日に在る、曽つての正規軍人としての私にとつては望外の喜びであります。

最後に、今後共若い世代の御縁故者により、此の会が末永く存続し、我が国伝来の心である御父祖の神霊を慰め続けられんことを祈念申し上げ擱筆致します。

以上

慰霊祭に出席して

（ルオット）山下タエ

マジュロに政府の慰霊碑が建設された年に皆様と共に参列させて頂きましてから四年目をむかえました。

今年は息子と一緒に靖国神社の慰霊祭と直会旅行に参加させていただき、只々感激と感謝の気持で一ぱいでございます。

日本の勝つことのみを信じ全国民必死で戦ったあの日々、今はすでに父母や兄弟姉妹もつぎつぎと亡くなり、当時のことをしみじみと話し合う相手も少なくなり、忘れられようとしている時代のようです。

戦死した方々の犠牲によって今の日本の繁栄があり、今の平和があることを決して忘れてはいけないと念じつつ菩提をとむらっております。

息子も戦後生れのため、この機会にと思い今回出席させて頂きましたが、とても感動し参加したことに意義を認めよろこんでおります。

先般の巡拝の折には、ルオットには行けず残念でしたが、今回立派な日本人墓地をつくって頂いている写真を拝見し、とてもうれしく安心いたしました。人種をこえ、人類愛に立脚したアメリカの方の御厚意に感謝の気持で一ぱいでございます。

（〒857佐世保市矢岳町三四五―一七）

スポーツマンで庶民的な朝香宮正彦王殿下

野村盛弘

私は海軍兵学校第六十二期生徒として、幸い殿下と同じ分隊で過ごしたこともあったし、特にスポーツを通じて親しくお付き合い願った関係もあり、殿下に関する主として兵学校時代を中心としての思い出をたどり、あまり表面に出なかったような話題に触れることにしたい。

何しろ殿下は、日本の皇族として最初に講道館初段の免状をもらわれた方で、運動神経はよく発達しておられ、特に野球、ラグビーは、お好きでもあり、またお上手でもあった。野球では名遊撃手として我々クラスの中心的存在で、折角の日曜日などでも真っ先にグラウンドに出て、教官チームや他学年との試合を計画、挑戦されたものである。肩はあまりお強い方ではなかったが、守備とバッティングの確かなことは定評があった。当時硬球でプレイされる宮様は、少なかったのじゃないかと想像する。

「スマートで、目先がきいてき帳面、負けじ魂これぞ船乗り」と大石教官に教わったが、殿下はスポーツの試合を通じて自ら体得されたのか、負けることが嫌いで、試合などでも、常に何とかして勝ちたいという燃えるような闘志を持っておられた。野球の試合のときもそうであったが、こんなことがあった。

我々のクラスの奇数、偶数の分隊対抗ラグビー試合が行われたことがある。そのとき相手側のチームのTBに、田淵君がいた。ご承知のとおり、彼は体力があり走力もあったので、少々の防御では防ぎ切れず、トライされる懸念が多かった。試合前殿下が「警戒すべきは田淵だ。田淵をマークしないと勝てないぞ」と言われた。

彼は当時柔道3段の猛者で、体も大きく走るのも速かったが、柔道のため肩を著しく傷めていた。殿下はこのことをご存じだったかどうか、試合が開始されるや、殿下自らまるで目の敵のように彼をマークして、猛烈なタックルあるいは反則と思われるような烈しい体当たりを敢行された。ために彼はついに肩の痛みがひどくなり、退場を余儀なくされた。私など、その恐るべきファイトに、ひそかに驚いたものである。

また、他学年との試合のときなど、熱戦のあまり興奮して、「こいつ」と思われる相手をねじ伏せるような行動をされるのを見受けたことがある。とにかく勝つためには、ものすごいファイトを燃やしておられた。短艇競技のときなども、間髪の差で負けたとき、涙を流して悔しがられた。この負けじ魂を、最後の場合遺憾なく発揮されたものと想像し、胸の熱くなるのを禁じ得ない。

しかし、このようなチーム対抗の勝負には特別のファイトをわかされるのに柔道、相撲のような一対一の試合には、どういうものか十分実力を出し尽くされない一面があった。人前で華々しく勝ってみたいという欲がなかったのかも知れない。柔道の場合など、クラスの者とか、よく知り合った相手には闘志があるのに、大勢の前であまりよく知らない人と試合するときなど、おとなし過ぎる面も見受けられた。

私などと練習するときは、「イイーッ」と掛け声をかけ、歯を食いしばって、それこそ喧嘩腰で何とかして倒してやろうと立ち向かって来られ、なるほど初段の実力は十分あると感心するのに、試合では実力を十分発揮されなかった。お育ちのよさの一面であったのかも知れない。

殿下はまた走る方、特に短距離には自信を持っておられ、私などしばしば百㍍競走を挑まれたものである。体技競技の前などは「オイ、ノム、競走をやろう。今度は負けんぞ」と言って、よく競走した。70～80㍍でちょっと差がつくと直ぐ断念されて、再起を図られた。お気の毒だったが、幾度挑戦されても、一度も負けなかった。しかし一号生徒のとき百㍍競走に出場され、「11秒8」の自己のベストタイムで2位に入賞されたのはお見事であり、ご満足であったようにお見受けした。

殿下はまた一面、特別扱いをされることを喜ばれなかったようである。当時から既に、特に民主的であられたと言えよう。

乗艦実習で高松に寄港したときのこと、宮様がおいでになるというので、女学生が上陸地点から道路に沿って並んでお迎えしていた。ところが殿下は我々一般の生徒と一緒に歩いて行かれるので、迎える女学生の方は、どの方が殿下かさっぱりわからない。気の毒なので殿下に申し上げたが承知なさらず、依然として我々と一緒に歩いて行かれる。そこで茶目気の多い連中が交代で、ちょっとすまして殿下気取りで歩いて、多分殿下と間違われたらしいと自認して、得意になったことがある。

また原村の演習に行く途中、西条付近の町に宿営したことがある。我々は殿下とご一緒に、小学校の講堂に宿営した。殿下は、真ん中に簡単なご寝所をこしらえて休まれた。そのとき町や学校側は、将来の記念に殿下のお休みになった畳を保存したいから、畳2枚

に寝ないで一枚の畳に休んで頂きたいとのことであった。殿下はこれにはご不満のご様子で、御付武官や教官が困って、ゴタゴタしたことがあった。

あとで私が国民の気持ちを説明して、むしろあんなときは素直におききになった方がいいですよと言ったら、荒い口調で「僕は国民のデコレーションじゃないヨ」ときつく言われ、殿下はそんな考えを持っておられるのかとびっくりしたことを、今でもよく記憶している。

これは私が戦傷で横須賀海軍病院に入院中のこと。もちろんそのときはもう殿下は臣籍に降下しておられたが、たまたま横須賀におられたので時々お見舞い下さり、私はいたく感激していた。ところが、いつもおいでになるのは、玄関からではなくて、裏口から、ご自分で靴を持ってはいって来ておられたようである。あるとき、赤十字の看護婦の一人がそれに気付いて私に、時々裏口からお見舞いに来られる方は宮様じゃないですかと質問した。どうして知っているのかと聞いたら、家が品川の御殿の近くなのでよく存じ上げているし、よく似ていらっしゃるとのこと。「そうだ」と答えたら、その謙虚なご態度に感心もし、またびっくりもしていた。

その後看護婦連中がどの人が宮様かと非常に関心を持つようになり、「今日見えた方じゃないですか」と聞いたのが、園川君である。彼にその話をしたら得意になって、「大体貴様の所に来るようなやつで殿下に間違えられるようなノーブルな人間は、おれ以外にいないよ」と、大いに気をよくしていた。その園川君も戦死してしまったが、当時の彼の姿が目に浮かぶようである。

当時のこと、宮様と言えばそれこそ雲の上の人で、我々俗人と全然違うお方だと思い込んでいたが、兵学校に入って親しくお付き合いしてみると、やはり同じ人間だということを、まず痛感するようになった。バンカラで育った私など、当時の流行歌などあまり知らなかったが、短艇巡航に行ったときなど、殿下から坂田山心中の「天国に結ぶ恋」とか、「獄窓の歌」などを教えてもらったものである。

初恋のお話など、恐縮して伺った。また休暇から帰った後、「ノム、ラブレターを見せてやろう」と言われ、そんなものをもらったことのない私はかえってびっくりして、まさか殿下がと思って拝見した。もちろん普通のお手紙で、やんごとなきお方からの、休暇中の思い出などを水茎の跡も麗しくしたためたものであった。

兵学校で殿下が一番困られたのは、生活の急変と食事だったろうと想像する。麦飯は最初困られたらしいが、食事の不平は一度も言われたことはなかった。全部食べられないことが多かったが、ライスカレーと薩摩汁は喜んで食べられたのは、不思議に思った。

兎狩とか宮島なんかに行ったときは、野外で炊事するため、お代わりができた。こんなときは大概、ライスカレーか薩摩汁だった。お代わりなどすることが恥ずかしいのか、「○○、頼むよ」と言ったふうで、我々がついであげた。火曜日、木曜日の夕食に出る生菓子はほとんど食べられなかったので、殿下が残して出てゆかれるのが楽しみだった。

（〒671-22 姫路市書写台3—109）

（編者註）本稿は、海兵62期会編「無二の航跡」の中から関係者の好意により引用させて頂きました。尚この度野村様から多額の御寄付を頂きました。

殿下の御略歴

大3・1・5　御誕生
昭6・4・1　海軍兵学校入校
9・11・17　同校卒業
11・4・1　音羽の家名を賜わり侯爵を授けられる
14・11・15　任海軍大尉
18・10・15　山城分隊長
18・10・25　第6根拠地隊司令部附
18・12・20　第65警備隊副長兼分隊長
19・2・6　第6根拠地隊参謀
22・4・21　クェゼリン島にて戦死
任海軍少佐
靖国神社に合祀

音羽侯爵こぼれ話

音羽侯が大鳥島（ウェーキ島）に勤務された時のことを同島の第65警備隊軍医長宮崎俊匡氏が「黒い珊瑚礁」（河出書房新社発行）に記述しているのでその一部を次に引用させて頂きます。

◎十一月に入ってから間もなく、思わぬ「珍客」が、この島に空路到来した。侯爵音羽（元朝香宮）正彦海軍大尉その人である。入室中の副長は病状が一進一退であったし、戦況は予断を許さなかったから、このままでは心もとないと、クェゼリンの司令部は思慮したのであろう。さらに、孤立無縁となったウェーキ島の士気を鼓舞するためにも、臣籍降下されたとはいえ、もとは金枝玉葉の身である音羽侯を、はるばる差し向けたのに違いなかった。

◎音羽大尉が着任してから、島は、心なしかのびやかに落着いた。おれたちは見棄てられたのではない。その証拠に、これほど尊い方が、われわれと危難をともにしてくれるではないか——そんな心理効果が、目に見えた。定期便的敵の空襲がふと途絶えたのも、あまねき元宮殿下の威光であると、信じようとした。そんな「かたじけなさ」扱いを音羽大尉は嫌った。静かな性格で遠慮深いたちであったが、こうと思ったことは、なかなかきかなかったし、副長としての職も、テキパキと片づけた。

〈以下割愛〉

K・S・ウィリアムス氏のこと

篤志会員　土屋太郎

マーシャル方面遺族会の前身であるクェゼリン島戦没者遺族会のことを初めて知ったのは第一回慰霊祭が行われた前年の昭和37年だったと思います。

私は、戦地勤務を命ぜられ、マーシャル方面にいた航空隊に赴任する途中、クェゼリン環礁のルオットで一週間ぐらい飛行機便を待っていたことがあります。

また最初の任地ミレにいるとき、タラワとマロエラップに一、二回、クェゼリンとルオットに数回行ったことがあります。いつも日帰りでしたが、飛行機隊が移動したときは一週間前後滞在し、クェゼリンでは、徹夜で飛行機に燃料を積んでいる最中、スコールに見舞われいつまで待っても止まず困ったことがありました。

タラワに米軍が上陸してから間もなく、私たちの部隊はウォッゼに移動し、そこで終戦を迎えました。昭和19年マーシャルに敵が来たときには、ウォッゼも激しい銃爆撃と艦砲射撃を受け、その第一日目の夜すでに、敵上陸部隊が見えるとの報告があり、対上陸戦闘を告げるサイレンが長々と鳴りひびき、全員玉砕を覚悟しながら、われわれ航空隊員も徹夜で陣地を作りました。間もなくそれは誤報と分かりましたが、絶え間ない砲爆撃は十日以上続きました。

昭和36年ごろ、私が文通を始めたK・S・ウィリアムス氏は、マーシャル作戦のとき通信隊員としてルオットに上陸、終戦の少し前、次の作戦準備のため本国に向けルオットを発ち、本国着と同時に終戦で退役、その後間もなく電子関係の技師として米海軍に就職、勤務のかたわら個人的に、マーシャル作戦の研究をしていました。したがって、米軍の戦闘について知りたいことがあったら何でも聞いてくれ、分からないことがあったら徹底的に調べて知らすと言っていました。

「ウ」氏の手紙によると、マーシャル作戦は昭和18年7月に計画が始められ、そのときには19年1月1日に作戦を開始する予定でした。そして8月にできた試案では、ウォッゼ、マロエラップ、クェゼリンの三環礁を同時に占領するようになっていました。ところが11月のタラワ作戦で、予想以上に大きい被害を受けたので、目標が減らされました。すなわち、クェゼリンは占領しても大型機の飛行場を作るのに手間がかかるので除かれ、ウオッゼとマロエラップ、またはその片方だけを占領することになりました。そのうち、タラワから飛ばした飛行機の偵察で、クェゼリンにある日本側飛行場が70パーセントぐらい完成していることが分かり、18年12月の第三週になって、ニミッツ大将が麾下各指揮官の強い反対――ウォッゼ、マロエラップをそのままにしておくと、米軍にとって大きな脅威になる――を押し切って、目標をクェゼリン環礁に変更したのです。

私のいたウォッゼ島が、作戦開始の直前まで、占領の第一目標になっていたことは、この「ウ」氏の手紙で初めて知りました。

こういう事情があったので、私は遺族ではありませんが、ぜひ遺族の方たちとごいっしょに英霊をお慰めしなければと思い、遺族会（まだ正式には発足していませんでした）のことを知るとさっそく、当時日本橋小舟町にあった泉商事に現会長の佐藤様を訪れ、お話したところとても喜ばれ、こちらがかえって恐縮したほどでした。

こうして、昭和38年の第一回慰霊祭にごいっしょすることができました。このときには、初代会長の林様など20人ぐらいの方がお集まりで、永代神楽を奉納されました。神楽の奉納に参列したのは、私としては、海軍に入ってから間もなくの昭和10年、伊勢皇太神宮の大々神楽以来のことで、殊のほか感慨深いものがありました。

第二回慰霊祭のときには、遺族の方にお見せできたらと思い、クェゼリンの写真があったら送ってもらいたい旨「ウ」氏に頼みました。すると「ウ」氏は意外にも米海軍担当者に交渉しました。慰霊祭と聞いて相手は好意を示しましたが、期待したような援助が得られなかった、と「ウ」氏はこぼしていました。それでも縦一m余り、横二m近くの大きな展示用の写真をクェゼンリとルオットと一個ずつ無償で作ってくれることになった、羽田までしか送れないので、誰か空港へ受取りにきてもらいたい、それを見れば日本軍戦死者を埋葬した場所も分かる、とのことでした。事が大きくなりすぎたのに驚き、翌日（土曜でした）の午後、佐藤様のところへ相談に行きました。佐藤様もちょっと頭をかしげておられましたが、自分が行くとのことでしたの

で、その旨「ウ」氏に知らせました。ところが、この大型写真には米軍の重要施設が全部写っていたので、機密の関係で取止めになり、「ウ」氏は残念がっていましたが、私はむしろほっとしたほどでした。

写真と同時に「ウ」氏は、現地の砂を取りよせてもらいたいと米軍に頼みましたが、これは慰霊祭に間に合わないとの理由でことわられました。そこで「ウ」氏は、クェゼリンにいる友人に頼んで送ってもらい、そのうち必ずお届けする、と言ってきました。護衛艦「あまつかぜ」に託送され、昭和40年横須賀に着いた霊砂は、こうして送られたものです。このとき私は江田島にいて出迎えに行かれませんでしたが、艦長菊地政秋氏は、横須賀にいた頃10年近く隣り同志で親しくしていた方で、あれこれ連絡をとるのに、とても好都合でした。

その菊地艦長も「ウ」氏も、今はすでに故人になられました。という私も遠からずその仲間入りすることでしょう。第一回慰霊祭のときもとめた冬青（モチ）木の苗木は、今わが家のささやかな庭の一隅で大きく育っています。この木のたくましい生命のように、私の死後はわが子わが孫が、英霊に対する感謝と慰霊の真心を、静かに強くいつまでもはぐくみ続けるよう願っています。

（〒240横浜市保土ケ谷区法泉一―二二―七）

南溟の護り

（クェゼリン）山口裕子

兄の戦死を知ったのは昭和十九年青葉薫る五月半ばのことでした。あれからすでに四十四年の歳月が流れています。

戦に散りにし兄の面影は
二十四歳のほほえみのまま

とつぶやいてきた妹の一人でございます。我が家の一人息子である兄の戦死はどんなにか父母にとって辛いことであったことでしょう。私達生き残った妹として当時は何かいたたまれない思いで申訳なく「この身にかえても」と祈らなかったことが悔まれた思い出があります。

戦争は敵にも味方にも本当にむごくおろかしいことです。でも一国の存亡をかけての戦なのです。世界の歴史を振り返ってみましてもなんと戦争の明け暮れであったことでしょう。平和を願うのは全ての人々の憧れですけれどこの世の中は戦いの連続です。地球上の何処かで戦争が起っています。日本の国は戦後めざましい復興をし物質的に恵まれて自国の戦争は遠い話になってしまいましたが果してこの平和は本当の平和でしょうか。物の豊かさは得ましたが大切なものを多く失っていることに気付かされます。この平和を本当の平和にする為にも、戦時中を生き抜いた私達遺族一人一人の役割を大切に思うこの頃でございます。

当時北鮮の地で水力発電の建設に従事していた父（註・本会副会長古賀織之助殿）は、十九年兄戦死の年の秋葬儀の折に「辱知黄吻の彼が二月六日南溟の護に潔よく玉砕いたしました」としたため

葉隠の流れに育つ若桜
武者絵に偲ぶ散りしく風情
老桜芽を吹きあげて闘はむ
若木にかはりさらにあらたに

と心情を詠み、銃後の守りを固め悲しみに耐えてまいりましたがやがて敗戦引揚げの身となり以来戦後の復興の為に再起して三十二年間にわたり力を尽し心を尽し九十歳まで生かされて過す事が出来ました。共に生かされて父をささえた母は、本当の戦死の日を確めたい一心を抱いたまま亡くなっています。

すべての戦場で二月六日に戦死をされた方々の為靖国神社で永代供養の慰霊祭が行はれ毎年お会していたクェゼリン方面戦死者遺族の方々から二十年祭の計画が持上り、環礁ですでにご存知のように三十八年にその準備が進められて翌三十九年二月六日いよいよ盛大に二十年祭が挙行されました。

以後毎年全国各地から、我が子を、父を、夫を、兄弟を、又親族の人を失われた多くの方々が集って来られます。そのお一人一人の心に戦場で玉と砕けられた英霊への思いは尽きることなく平和への尊い礎石として末永く後に続く若い人達へと、この会が引続がれて行くことは何よりの責務として強い願いとなって居ります。

どうか七夕のように毎年の慰霊の逢う瀬がささえられて行われますように……本当に戦場銃後にかかわらず、生死は確かに紙一重の差でございました。

はじめはクェゼリン島戦歿者遺族会でしたがやがて輪が広がりマーシャル方面遺族会として会員同志の親睦も深まり現地に慰霊碑が建ち墓参も幾度となく行われるようになりましたのもこの会発足の当初より熱い思いでご尽力下さいました浮田様、佐藤様はじめ幹事の方々その他厚生省関係の方々並びに現地をご存知でした方達クェゼリン本島関係の方々尚マーシャル諸島の住民の皆様等多くの方々のご協力の賜物でございました。

私達遺族の一員として心から感謝をこめてこれまでの折り折りの事柄をふりかえりましてこのような純粋な遺族会は他に例を見ないのではないかと思うのでございます。

父の手箱にクェゼリン島戦歿者遺族会の発起人会から三十九年二十年祭までの会合のすべて関係各方々の思いがプリントに偲ばれまして涙があふれ環礁の第一集を手に次々と思はず続みふけり時を忘れ、素晴しい遺族会の真相

をまのあたりに拝見し、ただ感謝致し多くの方々の尊いご労苦があったればこそと感激致しました。

南海の美しい珊瑚礁の島でありましたのに激戦の島玉砕の島となってしまった昭和十九年一月末から二月六日までの激しい戦い、地獄絵さながらの島の幾日を思い、かけがえのないお一人お一人の英霊に対して残された私達の責任の重さをひしひしと感じてまいりました。

「会員の皆様方共々に肉親を同じ島で　同じ時に失った者同志として　何時までも心を通わせながら　生き抜きましょう　それが英霊にご安心頂くことになるのですから……」と父が創刊号に述べている言葉をあらためてかみしめ往時をしのびました。

今後も慰霊碑を守って下さる島の人々との交流、美しい南海の島々が破壊されないようになど考えると遺族会の役目は大変だと思います。

文明の恩恵は雨の様に南の島々にふりそそぎ島の暮しは変ってきています。いろいろの面で文化的に発展向上している事は望ましいことですが反面失はれてゆくもの、むしばまれてゆくもののあることを、現地を訪れ強い痛みを覚えたことでした。心身両面の健康を憂慮されお互同じ地球人として見すごせない思いで居ります。私達への一つの大きな課題ではないでしょうか。これは本当に大きすぎる問題ですが慰め合いを越えて一歩前進するこれからの遺族会の在り方にもかかってくるように思えます。

それは尊い犠牲になられた英霊への鎮魂につながることを信じ、遺族会をここまでささえてこられた代々の会長様はじめ多くの方々への感謝と共に、これからの会の発展を心から祈りつつ私達に出来ることは何なのか？　小さなことから　愛に根ざして心を合せ何かをはじめてゆけるように　夢をあたため実現を希って居ります。

（故海軍主計大尉古賀正太の妹）

私の場合

（ウオッゼ）　高橋　とし子

昭和十六年の四月、日立製作所に勤めておりました夫（深吉）が招集され、残された子供五人を抱えての生活は仲々大変なものでした。初めのうちは会社からと軍隊の給料で食べるにはこと欠きませんでしたが昭和十九年の四月頃に空襲も一段と激しくなりましたので、やっとの思いで住み慣れた日立市から我が生れし槻木に疎開を致しました。でも戦争の続いているうちは生活にも張りがあり勝つまではどんな苦労も我慢せねば、という心意気がありました。

ああ……それなのに日本に利あらずして、忘れようとしても忘れることの出来ない、あの八月十五日の敗戦の詔が下りました。それを聞いた時は全身の力が抜けて今後、日本はどうなる事かと食事もろくろくのどを通りませんでした。夜中にフト目を覚ましては主人の事を思い、仲々寝つかれない夜もありました。汗の結晶で建てた日立の家も七月の空襲で焼かれ、火災保険を頂きに行った時には長い長い行列で、こんなに大勢の人達が家を焼かれ、家族を失ったのか、と戦争の恐ろしさをつくづくと感じました。そして我が家の焼跡に行ってみれば、隣近所の方達も家を焼かれ逃れる途中で焼夷弾が当たり死亡したり怪我をしたり、それはそれは目も当てられなかった由、私も早く疎開をして本当に良かった、とつくづく思いました。そのうち誰々さんの息子さんが帰還された、等という話を聞くにつけ、主人はいつになったら帰るか等と、そればかりを楽しみに待っておりました。

ああ……それなのにその望みも断たれ、昭和二十年の四月「マーシャル群島にて戦死」の公報を手にした時には、この世に神も仏もなきものか、とつくづくこの世を恨みました。でも五人の子供たちの事を考えるとあまり悲しんでばかりもいられず、一生懸命働いて、この子供たちを立派な人間に育てねば、と同じ境遇の未亡人仲間にお願いして塩釜に行って「わかめ」を仕入れてきたり、また福島に行ってはリンゴや梨を背負えるだけ仕入れてきては一軒一軒売り歩いたり、それでも生活は仲々苦しく「東京方面にお米を持って行けばお金になる」という事を聞いて東京にも連れて行ってもらったり、そんな時親切に「こうやって運べば一斉検査を逃れる事が出来るから」と教えて下さった仲間の方々、今でも忘れる事が出来ません。

主人の服、着物、靴等は全部農家に持って行っての筍生活、それでも子供たちの教育だけは、どうしてもやめるわけにはいかず育英会からの援助でやっと学校だけは高校、大学と卒業させることが出来ました。又その頃は食料も不足勝ちなので、どうしても自分で作らねば思うように腹一杯食べさせる事が出来ない、と思い、一里以上も歩いて行き田圃を作り、あの暑い土用の田の草取り、子供達も日曜日には一生懸命手伝ってくれました。慣れない仕事だったので、そのうち私も疲れが出て十日間ばかり腹痛を起こして田植ができず親戚の世話になったり、そんな時主人さえおったら、と泣けて泣けていたしかたありませんでした。

そのうちに遺族会が結成され、僅かながらも扶助料も頂ける様になり我々遺族としても、国のために働いた兵隊さん達の霊も、これで浮かばれる、と心から喜び合いました。

その後、遺族援護法も次第に改善され、今では充分とは申されませんが、それでも墓石を建立したり、孫達に小

遣いをやったり、仲間同志で楽しい旅行に参加したり、残り少ない人生を楽しく過ごしております。

昭和六十一年八月には、永年の念願でありました主人の戦死したウオッゼ島の慰霊巡拝団に参加し、戦友の方々の御案内で島を一回りして参りましたが、どの辺で戦死したのか、どなたも御存じの方が居られないのが心残りでした。でも、あのマジュロの慰霊碑の前の合同追悼式の時、遺族代表として追悼の詞を述べ、近況を報告致した時には万感胸に迫り声が詰まってしまいました。

今は娘や孫たちに囲まれて幸せな毎日を過ごして居ります。どうぞ御安心下さい。庭の梅もやっと咲き始め、ここ東北にも春が近づいて来ました。

悪筆をもかえりみず想い出すまま書きつらねました。会の役員の皆様はいつもお元気にて、会の為お尽くしのご様子、何よりありがたい事と存じ上げます。

この会をいつまでも続けていって下さいますよう心から、お願い申し上げます。

（六三・三・一七）

（〒989-16 宮城県柴田郡柴田町
槻木白幡二―二四）

激戦二十年後の戦跡 (1)

篤志会員　長谷川　敏

私は昭和三十二年より三十九年まで、天文測量のため南洋の島々をたびたび訪れました。その中には日本軍が玉砕したクェゼリン環礁やタラワ環礁をはじめ、先の大戦で戦場となったいくつかの島々もありました。

これらの島々のうち、内南洋の島々は戦後、日本の統治を離れた後は、三十数年の間、国連の信託統治下にあり米国が国連に代って治めておりました。私たちが訪れた時代は、南洋の島島への入国は厳しく制限されており、殊にクェゼリン環礁の島々は米軍のミサイル基地が設置されたため、ここへの出入は原則として禁止されていました。従って、日本人としては私たちが戦後初めて訪れたという島が殆んどでした。

これらの島々も戦後四十有余年たった現在では、大部変ってしまったことでしょう。それだけに、激戦後、二十年たっても残っていた戦跡は、激戦の様子の一端を偲ばせる貴重なものと考え、ここに幾葉かの写真を選んで掲載させていただくことにしました。なお、写真が一部散逸し、ここに載せられなかったものもあるのは残念です。

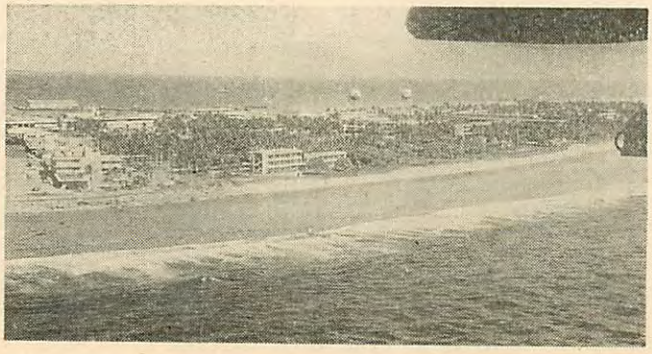
本会発行の小冊子「クェゼリン島の今と昔」と〃環礁〃第16、17号の「玉砕二十年後のタラワ環礁」に、それぞれの島の戦後の様子を載せましたのでその記事と写真も合せて御覧下されば幸甚に存じます。

クェゼリンの日本人墓地（35・6）

レーダー基地の近くに米軍の建てた日本人墓地があった。バタ臭い赤い鳥居が唯一つの目じるし、タコの木が茂り周囲に低い囲いがあった。

（註、この写真が36年5月23日の朝日新聞にのり、それを土屋太郎様（本会篤志会員）が私（佐藤）に教えて下さり、本会と長谷川様との御縁が出来、爾後の本会の活動に大きな影響を及ぼすことになった。

長谷川様は、アジヤ航空測量㈱の要務で、日本人としては戦後比較的早い時期にマーシャル・ギルバート方面に入り、長期間にわたって現状を見、聞き、写して来られ、本会にとって又とない貴重な資料を沢山提供下さった。その後の本会と現地との交流、現地調査、現地慰霊の途は、実にこの一枚の写真から開かれたと言っても過言ではない。）

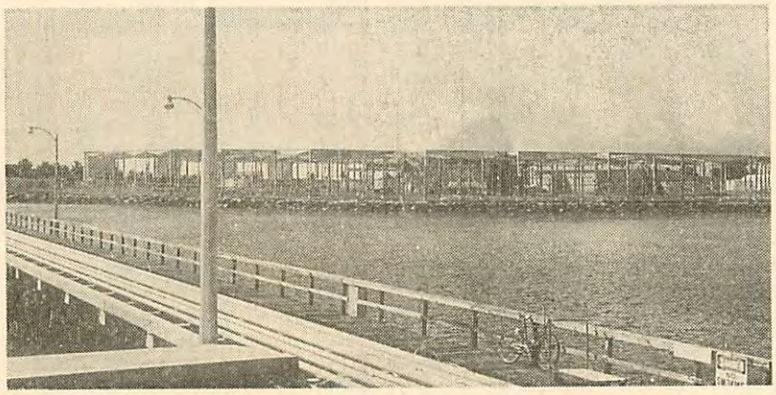


クェゼリンの住宅街（35・6）

クェゼリン本島はすっかり整地されて米軍のレーダーやミサイルの基地と

化し、激戦の跡はない。

クェゼリン本島を離れた小さな島に行くと未だに彼我の兵器が残っている。日本軍のトーチカや、米軍の上陸用舟艇、砂浜にエンコしている戦車らしいもの、船首だけを海の上に出しているどちらのだか判らない船、半分砂に埋った機関銃等が、戦争の生き証人然と控えている。



トーチカ（38・8）

水陸両用戦車（38・8）

二十年祭に参列の想い出

（クェゼリン）　高林セキ

昭和三十九年二月五日六日、東京の靖国神社で第一回慰霊祭が行われた。今日五日は前日祭である。東京の朝は冷たいが英霊の御加護によって空は青く晴れ渡っていた。午前九時半九段会館に着いた。入口には北は北海道、南は沖縄まで各県の名札が並び、役員の方々が受付に懸命であった。

前日祭は九段会館ホールで行われ満席であった。午後〇時三〇分開幕、海上自衛隊音楽隊の伴奏によって、参加者全員で君ケ代を斉唱、身の引きしまる思いがした。

舞台には黒幕が張られ、その前に日の丸が掲げられ前方には白布の祭壇が設けられて両端には白菊の盛花が飾りつけられ、いとも厳粛に祭典が行われた。参列者は比較的老齢の方が多いように見受けられた。我が子を、夫を、そして兄弟を、お国のために捧げて、こうして遺族の方々が一堂に集まり祭典にのぞむのが唯一の慰めであると思った。

古賀副会長の開会の挨拶につづいて元第六根拠地隊参謀林幸一氏からクェゼリン島の戦況報告があり一言も聞き洩らすまいと謹聴した。

つづいて映画「靖国の四季」など観賞、英霊もこのように鄭重に祀られている様子を知り心のやすまる思いがした。つづいて各代表者の献花があり、来賓の御挨拶、電報の披露があって幕が下された。

林会長の御挨拶の最後に、「本会は「佐藤君（現会長）が掘り起こし、浮田君（現名誉会長）が築き上げて、このように出来上りましたが、二人の犠牲的奉仕は私の口などでは到底あらわせないことであります」と述べられました。

二十五年過ぎた今でも昨日のお言葉のように耳の底に残っています。

翌六日当日祭である。九段会館の宿を朝九時に出る、昨日と同じく雲一つない晴天である。

九段坂を昇ると鳥居が見えてきた。靖国神社の参道の並木も暖かい日ざしを浴びて芽を吹き出しそうだ。参集所には、もう多くの方が集っていた。十時三十分朝香名誉会長と、靖国神社筑波宮司の御挨拶があって祭典が始まった。

静まり返った靖国の社頭で、皇居警察本部の音楽隊の「海行かば」の奏楽に身の引きしまりを覚える。筑波宮司の祝詞、又朝香名誉会長の奉上された御祭文は涙なしでは拝聴することができなかった。英霊に呼びかける一言ひと言が身に刺さるように泌みた。涙が止めどなく流れた。あちこちからもすすり泣きの声が洩れた。英霊もさぞ御満足だったこと、と思う。

ついで全員本殿に参進、肉親の霊と対面、心ゆくまでお慰めすることができた。来年もまたきっとお参りにくる事を誓って退下した。

遺族会ができてから二十五年。そして玉砕の年から数えればあと数年後に

は五十年祭になる。親から子へ、子から孫へ、と受け継がれ何時までも本会の活動の続くことを祈りつつ筆をおきます。

忘れられぬ日

（クェゼリン）石谷典夫

人は誰でも、生涯決して忘れることの出来ぬ日がいくつかあるという。私にとって昭和十八年十二月十二日も、その日の一つである。当時、東京憲兵隊、牛込分隊に配属されていた兄は、命令により、新設される南洋憲兵隊の要員として、この日、午前東京駅から同僚二人と共に出発した。そして生きて再び祖国の土を踏むことはなかったのである。両親、兄弟、親戚など八重洲口通路の窓から見送る私達に、兄達は、列車最後尾のデッキに立ち、兄はその中央で右手にした、ハンカチで大きく輪を描き、見えなくなるまで、その動作を続けていた。これが今生の別れであった。そして僅か二カ月余を経て、渋谷区役所から『戦死』の公報が届いた。

その後、二十年余りの時が流れる。或る日、ふと新聞記事を読んで驚ろいた。

マーシャル群島方面で戦死された英霊の、みたま（霊砂）が母国日本に還られるという。私は直ちに厚生省へ行き、浮田信家氏（現名誉会長）をたずねた。浮田氏は激務中にも拘わらず、親切に応接して下され、状況を聞いて下さった後、現会長、佐藤氏の事務所を教えてくれたばかりでなく、細部に互り、適切な指示を与えてくださった。

その足で佐藤役員の処へ駆けつけた。

話は前後するが、兄の戦死後、直ちに世田谷区烏山町に墓地を購入していたが、然し敗戦後の混乱期、生きて行くのが精一杯で、申し訳ないとは思い乍ら、未だ石塔を建てる余裕とてなく檜の柱を以って、そのしるし、として済ませていたのである。やっとのことで、石塔、墓碑などを、この年、四十年秋建てることになり、同時に法要を営む準備を進めていた。その時、新聞で知ったのである。

佐藤役員から「霊砂」を拝し頂戴しカバンに納め、手のひらが汗ばむほど力を入れ、緊張して家に帰ったのを覚えている。

「霊砂」は、半量を直ちに寺院に届けた。半量は、その後、今日まで仏壇に安置し、朝夕合掌を続けている。

尊とい「霊砂」は、石塔のカロートを封する寸前で間に合い、私の立会いのもと、石工職人が丁重にセメントでかためた。

気品ある住職は、静かな口調で語った。

「よく、こういう話はあります。これも、何かの仏様の、お引合わせでしょう……」私は涙で眼前が見えなくなった。あれから早くも二十三年目の歳月が過ぎ去った。

クェゼリン島の「霊砂」は今も、静寂な環境に囲まれた中で、永遠の眠りについている。

南の島を想う

（タラワ）中村　久

兄がタラワ島で玉砕していた事を知ったのは、私が昭和21年5月ニューブリテン島ラバウルより名古屋港に復員上陸した時である。

昭和19年10月末からラバウル港の上空は連日の大空襲で、迎撃戦が続き決戦の毎日であった。その頃よりギルバート諸島タラワ、マキン方面へ米軍の攻撃が始まった。お互いに知る事も無く無念！兄は遂に南太平洋の孤島で玉砕したのであった。

駆逐艦「夕雲」より昭和18年届いた暑中見舞（その後に横、第六特別陸戦隊で上陸したらしい）の軍事郵便が手許に一枚残った。

昭和54年静岡県庁よりマーシャル遺族会を紹介され、早速浮田前会長様に連絡、入会させて頂き「環礁」を拝読し、願望であった現地慰霊の計画を伺う事が出来た。

昭和56年8月、田中さんを団長とする慰霊団に、家内共々タラワの墓参が叶えられた。57翌年11月23日にはペシオ島慰霊公園に南瀛の碑が完成し我々35名も同行、除幕式を厳に行う事が出来た。米軍の猛攻撃を受け僅か数日で全員玉砕というきびしい「戦闘」は今でも鮮明に蘇って、大きなむなしさを感じる。数年の空白を心から詫び、散華された彼我の英霊に安らかにお眠りあれと遺族一同と祈りを捧げ供養する事が出来た。本当に有難うございました。

環礁各号に掲載の各種の記事、中でも「タラワ恐るべき戦闘記録」等想像を絶するものであった。その他遺族会を探し当てたその喜びや、現地慰霊特集号、戦記シリーズ、タラワ島慰霊、ギルバートの慰霊碑建立詳細、遺族会10年のあゆみ、談話室には会員の方々の心に残る思い出話、マリア観音像建立完了等々、貴重な内容が数多く有意義に読ませて頂いた。又昨年11月には昭和62年度沖縄東京の塔追悼式に、高林様御夫妻、昼間様、滝様と参列させて頂き有難うございました。

又、本年二月には定例慰霊祭と総会後、直会旅行に初参加、同じ境遇の遺族が遠く沖縄を初め各県より参加され甲州、石和グランドホテルにて亡き父夫、兄、弟等の心に残る想い出話に花が咲き、護国神社の精進料理等戴き又来年を楽しみに無事解散出来た。皆様の貴重な記録談「環礁」を之も供養と思い何回も拝読させて頂き、歴代の役

員の方々には毎年の行事や直会旅行迄心暖まる運営に預り感謝に堪えません

今だに「死の灰に汚染された島」がある事も忘れてはなるまい。戦後43年もう還暦を迎えるが、悠久の平和を願うのが私の使命と心得えております。

（〒167杉並区荻窪四―七―二六）

戦地からの便り

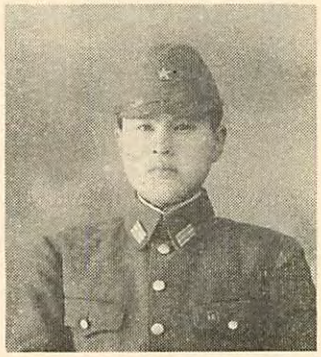
（クェゼリン）高橋鎮夫

兄　裕（大正9年生）は、昭和16年3月北大土木専門部卒業と同時に蒙古自治政府に就職し、17年1月北部第七部隊に入営。その後満洲に転出、18年11月海上機動第一旅団工兵隊に編入され（駆三一三六部隊）12月14日釜山を出港、途中トラック島寄港、19年1月はじめクェゼリンに上陸。19年2月6日玉砕しました（陸軍中尉、数え年25才）。

蒙古からは長文の手紙が沢山きましたが入隊後は急に少くなり、特に南方からは端書7通のみです。場所、日附は一切ありません。父母宛の分は母が全部保管していましたが、父母も既に他界し、今は私が代って手許に保管しております。

昭和十八年八月五日附

今夏は札幌も例年にない暑さの様に友達からも便りありましたが、如何過されてゐますか。小生は、何一つ障なく益々頑健にて頑張ってゐますから何卒御安心下さい。



お父さんは又新しく勤められた様ですが如何ですか。決して無理されぬ様気を付けて下さい。鎮夫（当時20才）も下宿した由ですが、環境の変化も又良いと思ひます。大分永くなりましたので本人も何かと満たされぬ点もあるのでせう。家庭教師などと云って寄越てゐましたが体も体ですし、なるべく止める様云ってやりました。やっぱり家計の方気にしてゐるのでせう。私が今年の暮、任官でもしましたら（尤も之は確実なんですが）鎮夫の分位は充分負担してやらうと考へてゐます。

いろんな関係で、本年は我々見習士官も未だ士官勤務をとってゐませんので、月給は只今二十五円丁度ですが何とか賄ってゐます。尤も小遣丈けですから。十月から士官勤務を執る予定で、之を執ると六〇円程頂けます。

時代が増々切迫して来ますので、本当に緊張してゐます。映画一つ見ても何か済まない気がする位です。

七月一杯某重要演習に小隊長として参加し、無事帰隊現在に至ってゐます。八月出る予定でしたが予定変更になり当分、隊に居ります。（九月半ば頃まで）

次第に夏が遠ざかりますが、まだまだ日中は仲々の暑さで、作業も朝早く起きてやってゐます。畑もよく稔りました。現地自活という事が非常に叫ばれ、隊でも相当やってゐます。きうり、茄子はもう盛りを過ぎました。トマトが毎日食べられます。西瓜も南瓜もよく実りつゝあります。とうきびも次第に大きくなりつつあり、いろんなものがよくなって楽しみです。来年は水田もやる予定です。以て、如何に食糧問題に意を傾けてゐるか御わかりでせう。

澄子（当時13才・病身）は相変らずらしいですが、全く可哀想ですね。先日守田（現役免除）から便りありました。母さんも大分年老いた様に見えたなど書いてありました。

佐藤が応召した様ですが、恐らく帰される事と思ひます。

銃後も涙ぐましい緊張の事と想像に難くありません。本当に国家興廃の危機であると断言されます。毎日のニュース、諸情報が最大関心事の一つです。

網走の叔母からも近々引越す様な事――便りありましたが、お祖母さんが淋しくならうなどと書いてありました。本当に大分年老いた事でせう。いくつか知りませんが、今度任官でもしたらお小遣でも送って上げ様と考へてゐますが。

鎮夫も今年は帰省せずに何か体を鍛へるらしいですが却って良いでせう。この様な秋に本当に勿体ない位ですね。

良子（当時16才）は相変らずですか。一学期の成績は如何でしたか。増々大きくなりつゝありませう。

何はともあれ、決して体を壊さぬ様にして下さい。体が何よりだとしみじみ思ひます。特に我々などは、体が弱くては何も出来ません。益々体に気をつけるつもりです。

暑さ尚厳しき折柄皆様の健康を祈ります。

八月五日　夜二一・三〇
満洲国東安省東安
満洲第八三部隊古東隊
高橋　裕

母上様

昭和十八年十一月二十七日附（十二月九日受信）

皆様御変りなく御過の事と思ひ嬉しく思ひます。小生今般大命を拝し、勇躍〇〇方面に出動致す事に成りました。

顧みすれば、種々想ひ出され、誠に感慨浅からぬものが去来致します。

この大いなる時代に生きて、この聖なる戦の真只中に挺身し得る光栄を担

ひ得たる事、感激之に過ぐるものなしと信じて居ります。

札幌も漸く白雪美しき頃と、憶ひを馳せます。過日、白いものをちらちら見ましたが、あの無数に落ちてくる雪の天使を眺める事は、限りない懐しさでした。

今宵この東安を去るに当って、二度と見る事のない曠野も又、一しほ胸を打つものが少くありません。

大東亜戦は増々苛烈、真に重大になって参りました。この危急存亡の秋に、南海の彼方に参ずる我身を、まことに美しく思はれます。いかなるとき、いかなる場面に遭遇しましても、正しく、清く、任務の達成に全智全能を傾けることを御誓致して置きますから何卒御安心下さい。

時間もありませずこれにて失礼致しますが、呉々も御身御大切に御過の程御祈り致して居ります。

南海の果に、悠久の大義に生くる日を望みて

二十七日

満洲第八三部隊古東隊

高　橋　　裕

父上様

母上様

追而、御近所の方々にも何卒宜敷く御伝へ下さい。

昭和十九年（日附なし）　（父宛）

皆様御変りなく御過と存じます。小生益々好調、大いに努力致して居ります故何卒御安心下さい。

仲々暑く、いささか南洋呆けの体、然し体だけは達者ですから御心配なく。雪が真白の事でせう。本当に恋しいです。

御健康を御祈り致します。

ウ五〇駆三一三一部隊

松下隊高橋隊　高橋　裕

（註）この葉書上部に「ク」の印あり、当時意味分らず、戦死公報の時点で「クェゼリン」の「ク」と考へた。本人がそれを知らせたかったのかも……。

昭和十九年（日附なし）（十九年二月二十二日受信）　（母宛）

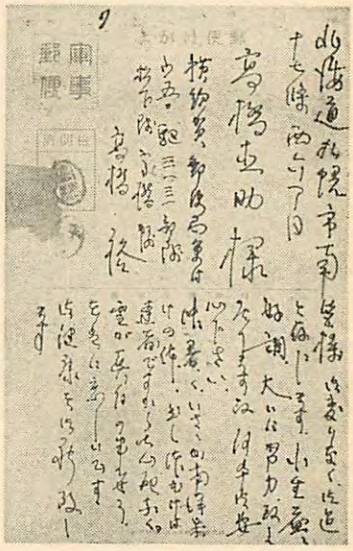
皆様相変らずと存じます。裕も至って無事任務に服して居ります故御安心下さい。暑さ（といっても大した事はありませんが）にも慣れ体の調子も頗る好く、何より喜んでゐます。如何なる事があっても、病で斃れるといった事のない様、充分注意してゐます。本当に黒くなりました。左手首の時計の革の痕が白テープでも巻いた様に白いのも、懐しい気が致します。

皆様如何御過しかと、只こんなに離れただけで、想像さへも届かなくなった様な気が致します。来る日も来る日も常夏の陽が眩しく輝きます。

はるかに御健在を御祈り致します。

ウ五〇駆第三一三一部隊松下隊高橋隊

高　橋　　裕



南十字星

（クェゼリン）岡野正文

61年に厚生省の慰霊巡拝団に参加させて頂きました。

現地での巡拝は公式巡拝後には個人的なお詣りが許され大変感激いたしました、八日間の日程中には巡拝以外にも生れて初めて体験することばかりで色々と感動させられました。

南十字星を見たこともその一つです マジュロ島　サン・ホテルで夕食後、同室の谷さん、西森さん、片山さん、山森さん女性三人とで、ここまで来たのだからどうしてもこの目で南十字星を見なければ意味がない、今回が絶好のチャンスと互に意気投合、早速総勢五人は十字星を見るべくホテルの受付で懐中電灯を借りて海岸に出てみることにしました。

ホテルの日本人支配人から「南十字星は天気の加減で仲々見ることができない、我々でさえここに来てから見た経験は数える程しかない、今夜は果して見えればよいが？　又夜間椰子林に入ることは危険です、椰子の実の落下に気をつけて下さい」と注意を受け、出かけました。

ホテルの囲りは椰子の繁みで南の空は見えません。

私共はホテルの道路向いにある椰子林に入り椰子の小株を分け分け南側の海岸線に出ることができました。

周辺は珊瑚の小岩と白い砂浜でした空は良く晴れ頭上には二本の大きな帯状をした天の川がハッキリと南に向って左上から右下方向へ虹のように水平線の彼方へ入っていました。

天の川の左右には大小の星が沢山輝いていましたが、さて目的の南十字星はどれであろうか？

どれを結んでも十字になりそうな星ばかり、決め手を持たない我々素人ばかりが懐中電灯を空に向けては十字になりそうな星を幾つか結んで見当をつけているうち、南十字星と思われる十字を天の川の右側で水平線からあまり高くない所に探し当てました。

一同、あった！　嬉しさと満足感！誰れもが感無量でしばし只無言で立ちすくんでしまいました。

昔から南の位置を示す星として遠洋航海者によって注目されていた十字星、電灯一つ無いこの浜辺では澄み切った空に、点々と見える大小無数の星

の中で南十字星は少し弱い光を放ち十字を結んでいました。

なんと素晴らしい星座であろう！当時マーシャルに来て初めてこの星を見た肉親も（今は英霊）同じ心境で眺められ、戦友同志歓談の一時を過されたであろう等と感無量でした。

さて我々はこの星を確めるべく一度ホテルに帰り、元海軍航海科であり十字星をよく知っている新潟代表の青木氏に確認をお願いし再び総勢八人で「南十字星宜候」と言いながら椰子林を通り抜け海岸に出ました。

青木氏は、先程の星を指して「あれが南十字星です、間違いありません、南十字星は45度の高さにあるんですよ」と教えてくださいました。

翌晩マジュロの人々との交歓パーティーが催され、昨夜眺めた南十字星の話をしましたところ「サザンクロスはいつも見られるとは限らない、それはラッキーだ」と言ってくれました。

丸い環礁の上空に南十字星の文様をもつ遺族会のバッチは英霊と私共遺族の心を結びつけるきづなであり遺族一人一人の数え切れない程の体験と感情と歴史の跡とから成り立ち……。

また幸いにもこの度亡き兄と同じ土を踏み、素晴らしいサザンクロス（南十字星）をしっかりとこの眼に焼き付けて帰ってまいりました私には、改めてこの遺族会のバッチの意味深さ、重たさをしみじみと感じる事ができました。

環　礁

会誌の名前「環礁」ですがこの度の巡拝団参加によって初めて機上から眺めたマーシャルの環礁の姿、これこそは真に遺族会誌名として名実ともの名前であると強く印象づけられました。

この名称は、本会発足当時の役員会で会誌名が議題となった折に、役員から「環礁」との発言がありましたのをうけて決ったと記憶しております。

南十字星と環礁につきまして今回感じましたことをここにつづりました。

以上は決して忘れることのできない貴重な体験でした。ここを借りて新潟の先輩に厚くお礼申し上げます。

また巡拝団、遺族会の皆様方には公私とも大変お世話になり誠にありがとうございました。

南十字星と環礁のことは以前五号と二〇号で橋口監事、浮田名誉会長、現佐藤会長様から発表されていますことを申し添えさせて頂きます。

（〒221横浜市神奈川区三ツ沢南町二―一）

新春に

（ブラウン）　星野綾子

初詣　兄の面恋ふ九段坂

（〒135江東区牡丹一―一〇―五）

お便りの中から

（ルオット）　田賀将一

亡父の顔なぞ勿論知りません。

私の場合あの当時には良くありましたように母が亡父の弟と再婚致しました。私は中学時代遺児の靖国神社参拝まで、自分が遺児である事を全く知らずに過しました。

このマーシャル遺族会には今の父に是非に、と進められ毎年家族全員七～九名にて参拝させて頂いておりました。その父も61年8月25日に死去致しました。私は二人の父を無くした事になってしまいました。爾後昨年からは私の名前にて会員登録をさせていただいた訳です。

私の家族は妻、長男（高二）次男（高二）長女（小三）の五人です。母は元気で隣の棟におります。

巡り合せが良いのでしょうか、御本殿参拝の玉串奉奠を親子合せて三回もやらせていただきました。感激です。

福井県は眼鏡枠の生産において全国生産の95％を生産しておるので眼鏡の総てが福井産といっても過言ではないでしょう。という事で私も御多分にもれず眼鏡枠に携わる会社（3社）の役員をやらせていただいております。

家族ぐるみの旅行等皆無でありますが、年にたった一度だけ、それが靖国神社参拝でございます。

本当に有難く思っております。

61年にマーシャル方面への慰霊が行われましたが、父の容体が悪く参加出来ませんでした。残念でたまりません。又ルオット島への入島も出来なかったという事も大きなショックでした。

京都の谷様にお願い致しまして、お供え物を届ける事が出来たのが幸でございました。何としてでも是非一度ルオット島に入島致したく思っておりますので何卒今後共、大変な御苦労とは存じますがご努力の程よろしくお願い申し上げます。母が元気な内にと願うばかりでございます。

昨年の慰霊の際、谷様よりいただきました英文の「クェゼリンとルオット（ロイナムル）の島々」を、英語を全く解せない私ですが、日本語になんとか訳せました。数名の方々には送らせていただきましたが、まだ少しならばコピーをしたものがございますので、もしご希望の方がおられればお送り致したいと思っております。30頁以上でアメリカ軍が記録したものなのでとても詳細にわたって、島が攻略される様子が記されております。

英文原文（多くの写真入り）のコピーもございます。コピーなので余り鮮明ではございませんが……

何か取り留めのない手紙になってし

まいまして誠に申し訳ございませんが何卒ご勘弁いただきたくよろしくお願い申し上げます。

（〒916 鯖江市神明町5丁目5番36号）

（クェゼリン）　安福道明

昭和六十三年度のマーシャル方面遺族会による慰霊祭に参加するため妻と共に二月十三日昼前に三木を出発、神戸、三宮経由にて新大阪より新幹線に乗車する。始発の為か車両の中は三、四人程度でガラ空き、ゆったりとくつろぐ。京都、名古屋と停車の都度、乗客も次第に増し静岡あたりで略々満席近くなる。

好天気のこともあり車窓からの田園風景、市街地の広告等々、久し振りの夫婦の旅は快適だった、富士山だけは積乱雲にさえぎられて、残念ながら裾野だけの遠望となる。東京駅には午後四時半頃恙なく到着。急ぐこともなし妻と二人、丸の内のビル街をぶらぶらと通り抜け散歩がてら宿舎の九段会館に向かう。

西日に黒ずむ皇居のお濠には、のんびり大きな白鳥と鴨の群れが遊泳していた。武道館を左に眺めつつ暫くぶりに訪れる九段会館、前回に訪れたときより改装の手を加えられ近代化されている様に感じた。

部屋に通されたときは小生が一番早かった。妻はご婦人連れの別室へ・。一人、部屋に休んでいると好青年の山下さんが到着、聞けばはるばる長崎県から、とのこと。同じ遺族の一員と言うことで気易く談話させて頂いた。

夕食も終わり部屋の浴室で旅の疲れを流し、寝床に横になっていると井上義夫氏が到着された。東京に着かれてから戦友の宅に訪問されてこちらに到着とのこと。お話をお伺いしていると小生と同じ病歴と手術の体験者であった。社会的にも大いに活躍なさっている近況を拝聴し感服すると共に小生も頑張らなくては、と鞭打たれる思いがした。現地で病に患され内地送還になられた、との事、戦友の壮絶悲惨な散華に思いを馳せられつつ切々と語られた一言一句、これこそ貴重な生還者の生の声として万感胸に迫るものを覚えた。

靖国神社では本殿前に静座、厳粛な慰霊の式典を営んで頂いた。社殿を吹きぬける早春の風と共に身の引き締まる一ときを過ごす。遺族の脳裏には各々戦死者のありし日の悌が交々偲ばれ四十数年の年月と共に、日本の世情の大きな移り変わりに思いを馳せられた事と思う。小生も質素な野良着姿の父を偲び、胸の熱くなるのを覚えた。黒毛の牛にカラスキを引かせ田を耕作したり細い畦道を巧みに歩き籾の運搬をしていた父、収入の乏しい頃とて米を売って買ってくれた小倉の学生服の紺の匂いのなつかしかったこと、親戚の頼母子講の保証から波及した貧困の果てに軍属として出発、四十五歳の生涯の終末をはるかマーシャル群島に散華せねばならなかった父、こんな父の子供もすでに還暦をとっくに過ぎ今では平穏な年金生活を満喫している今日この頃、楽しい直会旅行にもはじめて参加させて頂き石和温泉で楽しい一夜を過ごさせて頂く。前夜につづきここでも山下さんと同室させて頂いた。

翌日朝食の席で一足先に皆さんとお別れして甲府市内の武田神社善光寺等参拝の後、身延山久遠寺に参拝し静岡駅より新幹線に乗り継ぎ一路帰路につく。

久し振りに参加させて頂いた慰霊祭遺児代表として玉串をお供えしたことなど、思いで深い数々の収穫と共に、毎回こうして慰霊祭の諸準備万端ご準備下さる会の役員諸氏のご苦労に心から御礼申し上げますと共に、益々ご自愛になり他日お目にかかれる日を何よりの楽しみにペンを置きます。

雑　詠

宮司（みやつかさ）の
慰霊の詞に胸うちの
たかぶりくるを
耐えて坐しおり

父の部隊　全員散華の
マーシャルは
海遙かなる　環礁の島

三万五千　戦死の島に慰霊碑の
小さく建ちをり　現地写真に

戦死部隊　遺児代表の指名うけ
靖国神社に　玉串捧ぐ

一つ屋根に　子供夫婦と暮し来し
五年の年月　楽しきものを

（〒673-07 兵庫県三木市細川町瑞穂六八五）

（ルオット）　山下良輝

まるで数ケ月を経た山火事の跡を思わせるような、茶色一色の地肌が、盆地を囲む山々の中腹まで緑を侵し、同色のぶどう棚の枠組だけが寒さの中に震えているような、一種異様さの中に甲府の町はありました。

平地にも、緑は無く小説で読んだ武田信玄に、「甲州人は米を食べない」とありましたが、確かに水田は見当らず、どこもかしこもぶどう畑かもも畑。

この冷え切った畑しかない地に育った甲州の兵の強さが実感できるような光景です。

遠い昔、信玄亡き後、信長の兵に焼かれたという恵林寺の凍りつくような厳しいたたずまいに、その中で修業されていたであろう、多くの禅僧達の厳しさを感じ、災上する寺の中で動せず〃火もまた涼し〃と詠まれて死んでいかれた快国師の姿が偲ばれます。

この張りつめた、冷たい空気と風景の重圧に私は強い印象をうけました。

おそらく春になり実りの秋を迎える頃には、この盆地も日本のあちらこち

らと同じように収穫の歓びと、穫れた果実の香りで包まれるのでしょうが……。

私は初めて直会旅行に参加いたしました。同じような道をたどり今日に至った御遺族の皆様と同行の団体旅行、加えて歴史の一ページに彩りを残した武田信玄の里「甲府の冬の印象」、一緒に参加した母共々本当に意義深い旅行だったと感じております。

同行の御婦人の方々は、おそらく若くして御主人を亡くされた方々なのでしょう。つらい時期（このつらさは到底私には理解できないものだと思います。）…を乗り越えられて今バスの中で亡き夫と共に楽しく歌を唄っていらっしゃるのでしょう。

戦争が無かったならば、夫婦揃って旅行が出来たかも知れません。私は九州でジャズの店をやりながら、ジャズを自分でも演奏したりしています。

ジャズと言えば敵性音楽でした。今いろいろな国の人と一緒に演奏する機会がありますが、ルールさえ守れば言葉は通じなくとも一緒に演奏ができます。

現実の世界のルールとは、暴力を使わない、兵器で相手を黙らせない、ということでしょう。

これからの世界を担う者として、平和を願い、世界がそのルールを守って行くように希望し、見守って行くのが私達の務めだと思います。

甲州路への旅は、私にも真摯なひとときを与え、又同行の人達の人情深さに触れられて、参加して本当に良かったと感じています。

企画し御世話下さいました方々に心から御礼を申し上げます。

ありがとうございました。

（〒857 佐世保市矢岳町三四五―一七）

会友　井上義夫

私は前々から望んでいましたこの慰霊祭に思いが叶いまして今回初めて出席させて頂き遺族の皆さんに親しくお目にかかれ、甲州路の直会までおともできて大変満足でした。

私はクェゼリンの六十一警備隊庶務員として勤務中病気のため内地送還となり玉砕を免れこうして生きておりますが、先輩同僚戦友のみ霊にお詣りし残された遺族の方も現実にお目にかかりますと何か一抹のうしろめたさが心の隅にあったのは事実でした。

しかし私には皆さんが、お姉さん妹さんお兄さん弟さんにみえ肉親に思えてなりませんでした。どうか私をきょうだいと思ってよろしくつき合って下さい。実は私は肋膜炎に罹りクェゼリンから還されたのです。結局それが生死の別れ目となったわけですが、戦後再発し結核となり遂に肺手術三回、輸血四〇〇〇CC、高熱、血清肝炎と危篤状態が続き自他ともにもうダメかと諦め三途の川縁まで行きました。しかし手術前に祈っていたクェゼリン英霊の加護を得てこのむづかしい両肺手術が成功しお陰様で元気になりました。

亡き戦友が私を生かしてくれたのだと今でも信じております。ありがとうございました。

クェゼリン、ルオットやギルバート方面のご遺族の皆さん、どうか手をとり合い支え合って生きて行こうではありませんか。戦後四十数年今や天下泰平の豊かな日本、戦争のことはもう風化して忘れ去られようとしておりますが、私共には決して忘れられません。二〇〇万英霊の死によって今日の平和と繁栄があるのですから。

当日、四国の同年兵戦死者（六通にて、服部満彦君）の弟さんに、私が十数年前彼の母上に出した手紙を持参されてお会いしたのは幸運でした。

また機会を得て慰霊祭に出席し皆さんに再会したいと思います。役員の皆さま遺族の皆様本当にお世話様になりました。浮田名誉会長がも一度お元気になられますように。

皆さん佐世保の方にお出での節はどうぞお立寄り下さい。

（〒857-11 佐世保市木風町六九六の一）

（ブラウン）　藤田清瀬

桜の蕾も大分ふくらんできましたのに、寒い毎日でございます。

如何お過しでしょうか。

過日の慰霊祭、直会旅行の時は大変お世話様になり厚く御礼申し上げます懐しい皆様と久し振りにお会い出来、思い出話等に花が咲き大変楽しい二日間を過させて戴きました。でも残念な事に浮田様御夫妻、水野様のご出席が無くお会いする事が出来ませんでした。

バスの中で願ってもない、前事務局の安藤さんと隣り合せの座席で、会が出来る最初の頃の苦労話とか、二十年祭の時の感激、霊砂を横須賀までお迎えに行き、何が何だか分らないけれど涙が出て困った事、現地に送る慰霊碑の除幕式で無事に南の島の現地まで届く様、祈る気持で帰った事。話は尽きることなく、思い出も新たに、昭和五十年第一回現地墓参に参加させて戴いた夢の様な現実、毎年の直会旅行での楽しかった事等々々、次々と思い出され今更乍ら、浮田様、佐藤様始め役員の皆様のこれまでのご苦労に感謝しこの会の永く続きますよう祈り乍ら帰宅致しました。

年のせいか、昨年の四月から神経痛で足腰の痛みがひどく、直会旅行は一年ぶりのバス旅行でしたので心配だったのですが、何事もなく少しづつ歩く自信もつきました。

息子夫婦と俗に云う味噌汁のさめない所に一人暮しですが、夜は孫が泊ってくれますし、毎日病院通いですが健

康に気をつけて一年間休んでいた、詩吟、カラオケ等、なんにでも挑戦しあの世とやらの主人にお土産話を盛りたくさんにと考える今日この頃です。

マーシャル方面遺族会は私の生き甲斐であり心のよりどころです。

浮田様、佐藤様始め役員の皆様のご苦労はいつも感謝し、この会が永く続きます様お祈り致します。

（〒335埼玉県戸田市上戸田2―36―15）

（ウオッゼ）北原ひで

春とは名のみ大寒のような寒さの続くこのごろでございます。

過日マーシャル方面慰霊祭及び直会旅行の際は本当にありがとうございました。私共遺族には何より心安まるひとときでございました。お世話くださいました会長様はじめ役員の方々に厚く御礼申しあげます。

また、この度は私の稚拙な本を靖国神社の遊就館へとお奨めいただきありがとうございました。帰りまして早速北沢部長様宛にお送りいたしました。故人への鎮魂と存じ感謝いたします。

篠崎様の「鎮魂ウォッゼ島」ご連絡いただけましたとのこと、早速一部お送りいただきました。

かさねがさねありがとうございました。

写真を拝見して四十年前の戦を想い故人のことも偲ばれてなつかしくも心が傷みました。

長い歳月を経て今なお当時の姿をとどめていること思うと感慨無量でございます。今は年一度の慰霊祭をたのしみにしております。

この度は本当にありがとうございました。

御礼まで。

（〒338浦和市南元宿二三八―三）

（ウオッゼ）齋藤耕太郎

私と弟は昭和18年5月、私が内地帰港三日の休暇の中の一日弟と会い、靖国神社に参拝したのが最後でした。今にして思いますと弟はウオッゼへ出発する前の休暇だったのです。

弟は昭和17年5月志願兵として横須賀第一海兵団に入団、同年7月新兵教育を終了し、戦艦長門砲術科測的分隊に勤務、後昭和18年1月砲術学校に入校、陸戦教育終了後同年4月第65警備隊所属となり昭和19年10月31日ウオッゼ島にて戦死致しました。

私は昭和15年6月徴兵で横須賀海兵団に入団、教育終了後同年10月海軍航海学校に第3期普通科信号術練習生として入校、16年5月卒業し、戦艦山城航海科へ。後特務艦筑紫艤装員附となり、艤装終了後16年12月20日横須賀出港、第2南遣艦隊所属、第一測量隊の艦としてフィリッピン、セレベス島、ジャワ島、ボルネオ、昭南島等、小艦乍ら船団護衛、対潜、警戒、任務多忙でした。

昭和17年9月ボルネオよりトラック島方面へ移動第四艦隊所属となり、マーシャル、ヤルート島、クェゼリン、ギルバート諸島のタラワ、マキン、アパママ方面に約8ケ月おり、18年5月内地飯港、海兵団に移り、同年6月千島方面根拠地司令部へ転勤（北千島、占守島）昭和20年4月同島より横須賀海兵団に転勤。同年7月第14嵐部隊に転勤（宮城県荻浜基地）同地で終戦を迎えました。

数多くの戦友や弟の眠る現地に是非慰霊に参りたく思っております。

（〒192八王子市戸吹町一二三）

（クェゼリン）川上ミサオ

何時も環礁を送って戴きまして有難く拝見させて戴いて居ります。

戦死致しましたのは亡き主人の弟でございますが、実の所義弟はどこでどのように戦死したのか全く消息がつかめないのでございます。

昭和19年1月に一週間程休暇で帰って来ましたが其の時、今度南方の方に行かねばならないので後を宜ろしく頼むと、主人と私に言い残して出て行ったきり二度と元気な姿を私達の前に見せる事なく、二年程全く音信不通でした。そして21年8月6日に公報が入りましたものの遺骨が帰って来る事もなく現在に至って居ります。

後で聞いた話に依りますとクェゼリンの方に向ったらしいとの事でしたので、その途中で潜水艦にでも沈められたのだろうと思って居ります。

義弟の戦死当時の階級は確か海軍一等兵曹だったと思います。時々南の海の地図等見ながら弟が亡くなった海はどの辺りだろうか、等と考えて居ります。

戦死致しましたのは公報に依りますと19年8月10日でした。

白木の箱が帰って来るには来ましたが中には「川上正」と書いた紙切が一枚入って居る丈でございました。二十二歳でございました。

（〒819-11糸島郡前原町高田88―3）

会友江村源次

拝啓　今般慰霊祭、直会、共に会長様始め役員の方々の御尽力のお蔭を以って無事に終了しました。誠に御苦労様でした。有難く厚く御礼申し上げます。

扨てホテル同室の青木謹次さんは億洋丸乗組員で、十九年一月一日億洋丸が敵潜の魚雷三本にやられ轟沈で泳いだ方で、其の時の億洋丸の砲術長桑原正文さんは私の同郷出身海軍二年先輩で、大友達なんです。

十四日夕食後雑談中、「桑原さんを知りませんか」と問われ、「桑原正文

さんですか」と答えましたら「そうです。御存知でしたか」と話がはずみ私の手帳の住所録を書き写して喜んでおりました。又、井上義夫さんは佐世保で上等主計兵曹で終戦後海上自衛隊に入隊、四十六年定年退職一等海尉でした。戦時中第六十一警備隊クェゼリン勤務で私は第六十七警備隊分隊長だったと話を聞いて以後分隊長と呼ばれました。

十七日自宅安着、楽しい旅行が出来ました。

御礼まで　敬具

（〒949-81中魚沼郡津南町大字上郷子種）

（ブラウン）　和田和子

前略御免下さいませ。

御返事が大へんおそくなりました事をおわび申します。

実は、母西田安喜子儀昨年六月十三日に九十歳の天命を全うして永眠いたして居ります。

十五年程私方に同居いたして居りました。私は長女ですが暫らく体をこわしてぐづぐづして居りまして本当に失礼いたしました。詳しい資料をお送り下さいまして感無量でございます。

おわび旁々御礼まで（63・4・30）

（註、父君は、海上機動第一旅団長西田祥実陸軍中将。ブラウン防禦部隊総指揮官であったが、19年2月24日全員玉砕。環礁1～5、10～3、戦記～39）

〒546大阪市東住吉区東田辺2―21―5

（タラワ）　島袋ヒデ

慰霊祭及び直会旅行の際は大変お世話様になり有難うございました。

其の後も皆様にはお元気にてお過しの事とお喜び申し上げます。

農家育ちで農具を手にして過して参りました私は、生来の筆不精で苦手の次第でございますが。他様の文章を拝見させて戴くばかりでは虫が良すぎると思いまして、簡単にご挨拶の積りでペンを取りました。

毎年、慰霊祭に参加したくは思って居るのですけれど、農繁期とかち合って何時も望みを果す事が出来ずご無礼致しておりました。

今年はやっと希望が叶い皆様と顔を合せる事が出来、何よりと嬉しく思いました。

直会旅行も、忘れかけておりました、少女時代の歴史の一駒を思い出される武田信玄の里、暫し昔の思い出にひたりました。

孫の多恵子は初めての県外旅行で、靖国神社を目の前にし、戦争で亡くなられた方々がこんな大きく立派なお社に祀られて居る事を現実に見、言葉なく目を見張るばかり、そしてその影にある涙を思い、戦争の怖さと平和への願いを強く感じて居るようでした。

思いつくまま書きました拙文をおゆるし下さい。

会長様始め役員の皆様ご苦労様でございました。

今後共会のご発展を祈念致します。

（〒204-91沖縄市美里3―10―9）

（ヤルート島）　金崎キン

御手紙有難度うございました。

丁度息子が2月14日急に靖国神社に行くと言い出したので、御参りに行きましたらマーシャルの字が見えましたのでお尋ねした次第です。

皆様の御活躍、熱心なお集りに出会いつくづく来て良かったと思いました。

私等も何か御手伝いなりまた船の事でも御聞き出来たらと思い会に入れて頂きました。今まで秋田に居りまして只遺族と言うだけで海軍の事、南方の話も聞く事が出来ませんでした。

子供達も大人になりましたので何か連絡がとれないものかと考えて居りました此の頃です。

二・三年前から少し身体を悪くしましたので現地まで等行く事は出来ないと思いますが、せめて会の皆様のお話をお聞きしたいと思います。

初めての事で良く分りませんが何卒宜しくお願い致します。

（〒277千葉県東葛飾郡南町大津ヶ丘4―5―3―103）

（クェゼリン）　国松ふみ江

今日からお彼岸、暑さ寒さも彼岸まで、ようやく春の日差しに桜の蕾も今や遅しとほころびかけるのを待っています。

マーシャル方面遺族会の慰霊祭は私にとって一年ぶりに会える待ち人との再会の日なのです。皆様の元気なお顔を見、一年の無事を喜び合う、年中行事の一つ……何年になるでしょうね。良く続いてきました。

これは当会設立当初から永年にわたって歴代の会長さんはじめ役員の方々の大変なご尽力の賜物と感謝の他ありません。

これからもどうか当会永続の事何卒よろしくお願い申し上げます。

私達、今日あるのは偏に英霊のご加護故と信じ、これからも皆様に元気にお目にかゝれる事を楽しみにしております。

（〒141品川区上大崎二―二―二）

（ルオット）　園山和子

会長様はじめ役員の皆様方には御健勝の御事とおよろこび申し上げます。

いつも環礁を有難く拝読いたしております。

夫園山斉は、昭和十九年ルオット島（七五二空）に於て戦死いたしました。

当時幼なかった四人の子供はそれぞれ家庭を持ち円満に暮らしております。私は長男夫婦と孫三人に囲まれ平和に感謝し御霊の供養に静かな余生を送っております。

今顧みますといろいろな事が走馬灯のように浮んでまいります。

五十三年八月、会長様のお伴をいたし皆様と御一緒に現地を訪ねクェゼリンの墓前に額ずき英霊の冥福をお祈りいたしました。あの日の感激、念願を果し得たよろこびは終生忘れられない思い出でございます。

時は流れ早九年の歳月が過ぎましたけれど昨日のことのように思われ、往時を偲び乍ら供養の日々を過しております。これもひとえに皆様方のおかげと感謝いたして居ります。

只主人の戦死いたしたルオットにおまいり出来なかったことが本当に心残りでございました。

これからは健康に留意いたし静かに一日一日を大切に過したいと思っております。

平素格別の御厚情に預り誠に有難く感謝の気持で一杯でございます。

改めて厚く御礼申し上げます。

（〒693 島根県出雲市西林木町二四三）

靖国神社へ慰霊碑（副碑）の台座奉納

本会は昭和43年に、多年の念願であった現地慰霊碑をクェゼリン島に建立しましたが、現地参拝が容易でないことから、身近かな所でお詣りできるよう、49年の30年祭の折に、副碑を靖国神社に奉納しました。

以来宝物遺品館二階に安置されておりましたが、遊就館復元と共に同館一階に展示され、この程神社の御了解を頂いて台座を作成させて頂きました。

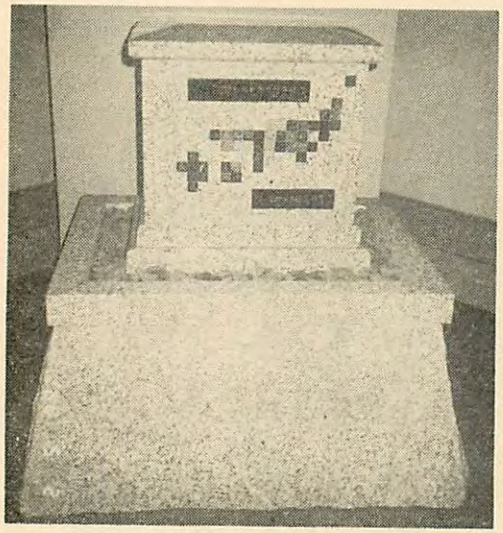
五月二日午前十時、役員と近在の会員が列席して、会長より松平宮司に、慰霊碑台座、クェゼリン、ルオット、タラワの写真並に維持基金奉納を言上、宮司より感謝状と記念品が本会に贈られました。

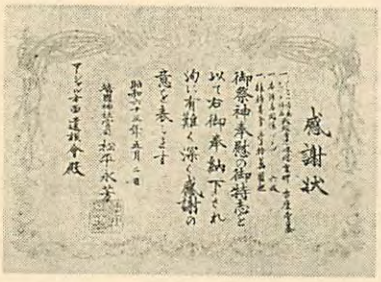
続いて清祓の儀が斎行され、一同神前に奉告参拝いたしました。

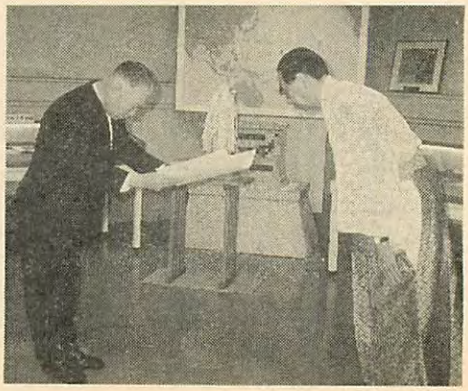
慰霊碑台座は、クェゼリンの正碑を製作した第一石材工業㈱内海社長の設計により、同社と友常石材㈱の協力で堅牢旦優美に出来上り、碑の風格を一段と格上げし、見る者斉しく感嘆の声をあげました。

特筆すべきことは、台座の中心部に南方24島の霊砂を収納したことで、本会会員にとってはこの碑に礼拝することにより二五〇〇浬離れたマーシャル群島に思いを馳せることとなりましょう。

会員の皆様は、靖国神社に御参拝の折は是非遊就館内の碑にもお詣り下さいますようお願いいたします。




感謝状



マーシャル諸島情報

マーシャル・アイランズ・ジャーナル紙より

1月8日号より

『新議会開会』

マジュロ発・1月5日

マーシャル諸島共和国議会・ニティジェラは、昨年12月の選挙後初の会期を恒例の新年最初の月曜日より開会した。

ニティジェラの議場はカラフルに飾り付けられ、大きなエバイ島（エビゼ島）の刺繍もかけられた。議員諸公は「ローラ・チアー」を歌って開会を祝い、フラワーレイを受けた。

開会の儀式の後まず議長選出選挙が行われた。新議長には79年より現職にあるアトラン・アニーン氏の後を受け、運輸・通信大臣だったカサイ・ノート氏が無投票で選出された。

その後アマタカブア・現大統領が大統領に無投票で選出された。

（注）1　ニティジェラ＝マーシャルの国会です。

（注）2　昨年12月に総選挙が行われた様です。新議長には本会でもおなじみのカサイ・ノート氏が選出され、就任されました。ノート氏は本会現地篤志会員山村要様の女婿にあたります。

（注）3　この選挙ではまた山村要様の御長男のヒロシ・ヤマムラ氏が当選されております。ヒロシ氏は高校の先生からの転進で、たしか35歳位ではないかと思います。母上の出身地のウトゥリックより立候補され接戦の末、当選されました。

1月15日号より

『新閣僚』

マジュロ発・1月12日

10人の新閣僚がアマタ・カブア大統領より任命された。

大統領（首相）アマタ・カブア
労働大臣　アムサ・ジョナサン
文部大臣　フィリップ・ミューラー
外務大臣　トム・キジナ
内務大臣　ロックナー・アブナー
大蔵大臣　ヘンチ・パロス
資源開発大臣　ベンソン・ワセ
社会福祉大臣　アントニオ・エリウ
法務大臣　クリストファー・ロエック
運輸通信大臣　クニオ・レュニ
厚生大臣　ルペン・ザクラス

以上であります。

（山口良二訳）

寄付者芳名

（敬称略・順不同）

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

◇**北海道**
堀口　三男　吉田　貫治　石川　きみ　岩佐　とみ　太田原タヨ
◇**青森県**
荒谷美佐男　田中　ロク　桜井　一正　野沢きくゑ　高安　コト
塚原　ハナ　本堂　テフ　山田　幹夫　高山　貞男　津久井艶子　廣原　チヨ
◇**岩手県**
小杉　リサ　菅原　キイ　宮本　豊吉　宮崎　實　谷沢　英子
◇**宮城県**
平形いせこ　松木　孝子　浄永　孝　田中　雄吉
高橋とし子
◇**秋田県**
奥山　キノ　熊谷サタヨ　◇**東京都**　吉田ヤヨイ　佐藤　宗丕
小前　ミヤ　小室舜司郎　佐藤　敏子　荒木　常子　小山キミ子　岩浪きよ子
関山富一郎　近藤キクエ　丹野　アサ　飯島浩一老　佐竹　エス　五十嵐孝三
◇**山形県**
大場美津子　冨田　ミツ　江間正二郎　石谷　トシ　黒川　誠
◇**福島県**
江尻　キヨ　栗原　利雄　国松ふみ江　小泉　文江
三浦　一郎　吉津ミドリ　山口　裕子　小池　勇二　斉藤耕太郎
◇**茨城県**
堀江　誠一　大熊　もと　雫石　ハツ　長谷川智子　伊沢　ヤス
若狭　明光　宮内　はつ　冨田　保　高橋　鎮夫　菅谷きよ子　金子　武晴
◇**栃木県**
大橋　サク　倉橋　たみ　神谷　和枝　谷梯　初江　菅沼　昇　沖立　キヨ
◇**群馬県**
森　ゆき江　猪瀬　ナカ　豊谷美恵子　内海　静枝　竹本　正平　栗田千代子
宇田川ひさ　木村恒三郎　植木市太郎　出口　スエ　佃　喜美　土方　フジ　石渡　綾子
小田原利子　井田　直忠　田名網武夫　中村　久　鳥居ミサヲ　中村喜久代　佐藤　登志
◇**埼玉県**
栗原　タネ　日向野キク　珍田　光子　昼間　楽平　原　富子　番場　信子　渋谷　良雄
菅井せい子　吉田　よね　浅野　チカ　水野　はな　福原　キチ　間々田やす　三村ともよ
福島　レイ　近藤マスエ　柴田　貞子　望月とよ子　山森　久江　六軒つる子
宇田川ひさ　長谷部なを　藤田　清瀬　神宮　佳子　大島　か乃　飯島　祐宣
小田原利子　山下　みつ　原田千三郎　安井　文子　沼山　正英　遠藤　安男
◇**千葉県**
福島　レイ　小林　ミツ　小野　リエ　大給　湛子　朝香　孚彦　熊沢　静子
宇田川ひさ　秋本　英郎　鈴木　裕子　斉藤　則男　川名　茂子
小田原利子　相川　孝夫　天野　ちよ　西森サツキ

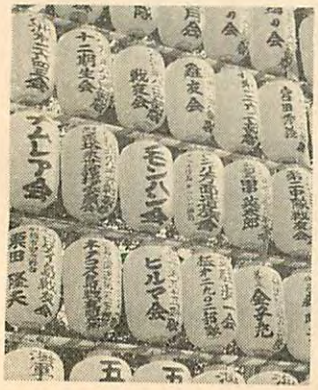
水上　フミ　柳田　国雄　吉永　梅子
吉田ミサヲ　平元チエ子　稲村　かつ
◇新潟県
石丸　進　青木　謹次　阿部　文吾
佐藤　フジ　片桐　さき　小林　正道
藤田　ヨリ　渋谷セキノ　高野　清
高林　セキ　坂井　繁男　山田　正三
◇富山県
棚橋　昭二　柴田外美子
小林　好子　池田　淑子　村梶　光栄
◇石川県　中林　ちよ　本多喜久江
吉光　澄子　高畠　芙容
◇福井県　林　庄三　永井　武弘
塚田　民子　田賀　将一　佐々木久子
◇山梨県　鳥羽　春枝
◇長野県　中山　いよ
中村なつ江　田中　八郎　星野うま子
宮入　貞夫　牧内　長逸　高見沢およう
◇岐阜県　宮下　礼子
吉田　綾　竹中　ユキ
◇静岡県　山田　八重
市川　市郎　赤堀　桂三
大畑はるゑ　江藤ふみ子　飯田たつ子
野崎　豊秋　曽根　エイ　大塚　かね
石川　冨夫　服部くにゑ　土屋まさ子
◇愛知県　山田　登世　松下　竜二
川村　正一　安藤　昌子　伊藤　博美
吉田ひさ子　川越　コウ　大原　儀一
◇滋賀県　岡島みね子　山田　あさ
国友　健蔵　大森　すず
◇京都府　川本　彦次
中川　修　中根　杉子　小林サ　ト
村上　増枝　八木　きよ　長谷川田鶴
◇大阪府　伊藤　登　中野フヂエ　安威　千鶴
堀家かつ江　松宮　花子
◇兵庫県　清水つちゑ　柴崎　晃
山本　允子　山形　雅俊　枝光　剛郎
◇和歌山県　山野イクエ
◇鳥取県　福井　栄子
◇島根県　杉川　及江
◇岡山県　園山　和子　藤原　照子
浜田　数江　中島　清子　木村　久子
◇広島県　金子ミサヲ
浦手　ハル　植田　操
田口マサヨ　奥井　礼子
松本タカミ　久保サクノ　小林アヤ子
◇山口県　多葉井八重子　藤本　正
道源　ヒサ　内富ミツヨ
◇佐賀県　嶋田　チヨ
犬山タツノ　廣田　通男　福谷　幸子
◇徳島県　田中　ノエ　坂本　トセ
◇香川県　栗本　孝一　坂本　栞
石川　正興　石田　藤美
奥田　マス　奥田　和広　多田　マス
冨田トシ子　松原ユキエ
◇愛媛県　井原トノヨ　伊藤　梅子
久保田泰子　小西アキヨ　宅見　運保
西　サクノ　松友　都　三好　邦博
森田　静子　山本　峯子　泉田　君子
渡部　守　清水　朝美
◇高知県　五百蔵国導
入福　菊恵　近森　幸恵　田中　百合
◇福岡県　吉松　貞子　徳弘　萩子
川本　彦次　河村　利三　家迫　ソヲ
中根　杉子　徳王　好子　鐘ヶ江敬介
八木　きよ　深川　芙由　西原　康雄
秦　サカエ　青山アヤ子
金子庄之助
◇長崎県　板浦　重雄　大石　春見
林　文枝　平田　利子　福田　音和
前田　フサ　松尾　フサ　山下　タエ
山下キクエ
◇熊本県　北村　権蔵　塚野ヨシ子
村上佳寿子　山部シゲモ　山中ヤエ子
植川　二男
◇大分県　衛藤　金喜　木ノ下貞子
南　ミツ　椛田志津代　石塚　文子
◇宮崎県　池田　トミ　稲留　タメ
山口　ミワ　山口マサ子　友枝カオリ
◇鹿児島県　川畑ツルエ　黒岩キミエ
染川とめよ　徳重ミツ子　原田　惟行
浜崎　武一　村上　ノキ　森　テル子
米沢　正夫　和田　芳久
◇沖縄県　石原　キク　小浜　春恵
宮城カマド　宮城　幸子　島袋　ヒデ
◇会友　篤志会員等　松平　永芳
大幡　幸吉　高田源次郎　井上　義夫
豊谷　秀光　香月　正紀　江村　源次
須藤　伝　足立　廣信　土屋　太郎
中島新之亟　篠崎　英夫　十二　徳次
ナウル島四高会　野村　盛弘
星川　武

（以上は62年10月1日から63年4月末までに寄付された三四二名で、金額の合計は一、四五一、八〇〇円であります。

光の祭典
靖国神社のみたままつり

恒例のみたままつりが今年も亦次の通り催されますので、皆様お誘い合せ御参拝下さい。

○七月十三日から七月十六日の四日間
開門午前五時　閉門午後十時
○昇殿参拝　期間中毎日午前九時から午後八時まで　希望者は参集所へ
○祭　典　期間中毎日午後六時より
参列希望者は午後五時四十分までに参集所受付へ
○神賑行事　東京の夏の風物詩として親しまれております。各界有名人の揮毫による懸ぼんぼり、献句、全国有名灯籠展、奉納芸能大会、献華展、盆踊り大会、みこし振り等々を御祭神とともに、初夏の一ト時を楽しく過ごしましょう。



写真は昨年の大型献灯の一部です。本会のものは、ノモンハン会の右に見えます。

マイロン中田夫妻、浮田名誉会長夫妻と喜びの再会

佐竹エス

マイロン中田夫妻は日本観光旅行中多忙なスケジュールをさいて、12月31日浮田名誉会長宅を訪問し、思い出多いマーシャル、クェゼリン島の話に花を咲かせました。

クェゼリン島の慰霊碑は、アメリカ軍人が人道的に管理してくださる事でしょう。ロイ・ナムルの慰霊碑も綺麗に管理されているようです。大里清さん達が、ペンキの塗替え等綺麗になされたようですと伺いました。遺族会が長続きしてほしいといっていました。急な訪問で皆さんにお知らせ出来ませんでしたが、皆さんによろしくと申されていました。

現地慰霊を希望する方々へ

今年は本会独自の慰霊団を派遣しないで、厚生省の計画に協力し、又参加希望者の要望を取つぐこととしておりましたが、六月八日、厚生省援護局より次の連絡がありました。

一、六十三年度のマーシャル諸島、ギルバート諸島の現地慰霊は、本年十一月より十二月にかけて実施する。

二、補助金支給の枠の拡大を考慮中。

三、実施要領は八月頃発表の予定。

四、日程、経路等は、従来実施してきたものと大きい変りはない予定。

以上のことは現地慰霊を希望する旨の通知を頂いていた方には即日お知らせいたしました。

日程、経路等が従来と大きくは変らないとのことですから。前の例を書いてみます。一応の参考にして下さい。

日程・経路等の前例

旅行日数　約十日間

経路等　東京に集合し、成田空港発サイパン、グアム、トラック、ポナペ、クェゼリンを経由して、マジュロ到着。東太平洋の碑の前で、合同追悼式。その後夫々肉親の散華された島毎の班に分かれて訪問、慰霊を行う。

従来訪問した島は、クェゼリン、マロエラップ、ウオッゼ、タラワ、マキンの各島で、ルオット、ブラウン、ヤルートは距離、人員、軍事上の理由等の関係で割愛されていた。

班毎の行動で、クェゼリン、マロエラップ、ウオッゼの班は各別に航空機をチャーターした時と、貨客船をチャーターした時とがあった。

該当する島に行けない人や、海上で散華された方の遺族のため、船を外洋に出して洋上慰霊式を行ったこともあった。

本日までに参加を希望された方は次のとおりです。この他に参加を希望する方が居りましたら本部にはがきを下さい。厚生省の発表あり次第情報をお届けします。

◎クェゼリン島関係

秋山　武（香川）　渡辺　三三（岐阜）
宅見　運保（愛媛）　中山　時野（佐賀）
鐘ヶ江弘明（福岡）　山田　正三（新潟）
山田キヨエ（新潟）　三上　幸雄（新潟）

◎ルオット島関係

岩田とし子（神奈川）　佐竹　エス（東京）

◎ブラウン島関係

星野　綾子（東京）　遠藤　安男（東京）
荒木　常子（東京）

◎マロエラップ島関係

大町　末子（京都）　岩川あい（北海道）
山内　キク（宮崎）　鳥丸　栄二（宮崎）

◎ウオッゼ島関係

高橋　克麿（栃木）　山田　幹夫（青森）
秋本　英郎（埼玉）　秋本　清子（埼玉）
大森　すゞ（愛知）　篠崎　英夫（東京）
山下　治（愛知）　中村　弥一（千葉）

◎タラワ島関係

中村　久（東京）　中野フヂエ（大阪）
奥山　キノ（秋田）　島袋　ヒデ（沖縄）

◎マキン島関係

井田　直忠（群馬）　井田　君子（群馬）
井田よしい（群馬）　井田雄一郎（群馬）
椛田志津代（大分）

クェゼリン島玉砕戦にたった一本残った椰子

本部だより

○篤志会員の移動

63年4月1日附で、浜松恒雄様が厚生省援護局業務第二課長に就任されましたので、前例により、本会篤志会員に委嘱いたしました。

篤志会員瀬沼光久様は病気療養中の処63年3月25日逝去されました。

○クェゼリンの米軍司令部より
好意の墓苑写真

昨年10月7日、クェゼリンのリチャード・チャップマン司令官宛に「クェゼリン墓苑の写真を靖国神社に奉納したいので、引伸しに堪えるネガを頂きたい」と所望しましたところ、早速三種類のネガと、写真、更にルオットの写真も添へてお送り頂きました。

予期以上の御親切なお取計いに役員一同感激いたしました。本号別冊、「25年のあゆみ」2頁の写真が、そのものです。五月二日の慰霊碑台座奉納の際同時に奉納した写真は、この度のことを永く後世に伝えてくれることでしょう。

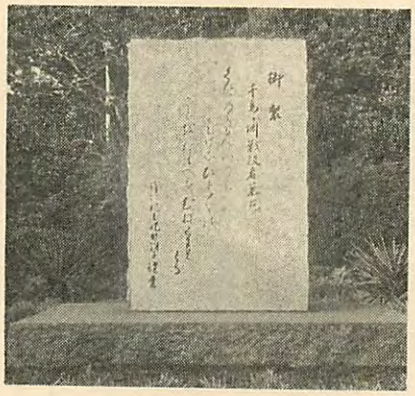
財団法人・千鳥ケ渕戦没者墓苑
奉仕会に加入

右墓苑には、大東亜戦争でなくなられた方のうち、政府が外地から持ち帰りながら遺族にお渡しできなかった三二万余の御遺骨をお納めしてあります。

同会は、その前身である全日本無名戦没者合葬墓建設会の会長を、村上義一氏（後の本会々長・当時運輸大臣）がつとめておられた関係もあり、本会関係者の中には右奉仕会の会員となっている方が大勢おられます。

本年2月26日、遅れ馳せ乍ら、本会は右奉仕会に特別会員として団体加入いたしました。

当日、本会が保管している南方24島の霊砂のうちから各約半量宛を同奉仕会にお預けし、御所望の方にお頒け下さるようお願いいたしました。



写真の文字は次の通りです。

御製

千鳥ヶ渕戦没者墓苑

くにのため　いのち
ささげし　ひと〻〻の
ことをおもへば　むねせまり
くる

雍仁親王妃勢津子謹書

＜右の碑は墓苑内にあります＞

○「25年のあゆみ・会員名簿」刊行

本会は昭和38年6月に創立され、今年は25周年になりますので、創立以来の主なできごとの記録と会員名簿を一冊にまとめて刊行しました。

これには多額の費用がかかりましたので、63年までの会費納入ずみの方にお送りしました。又62年まで納入された方にも、今年中に63年分を納入されることを期待してお送りしました。

名簿記載事項の、会員の氏名、住所等が変更したときは本部にお知らせ下さい。原本を訂正し、環礁に発表します。当初の計画では、会費未納の方は名簿にのせないこととなっておりましたが、折角御縁の出来た方がたとえ一人でも疎遠になるのは忍びないことですから、連絡のとれている方は全員登載いたしました。

○会費完納のおねがい

昭和39年の20年祭には八百名もの方が参加されましたが、ここ二、三年は同伴者を加えても二百名程となりました。会員の減少は已むを得ないことですが、英霊の御心情を思いますと、この会を長く続けてゆくことは私ども遺族のつとめと考えられます。

本会の活動に必要な経費はすべて会員と会友の浄財だけで賄われており、他からの補助等は一切ありません。会を長く続けてゆくためには財政の安定が是非とも必要でありますので、会費の完納に御協力下さい。

今後は会費を納めない方は退会の申入れあったものとして会報〃環礁〃の発送を中止いたしますので、事情御賢察下さいまして、悪しからず御了承下さい。但し、特別の御事情のある方とは個別に御相談したいと思いますので、御遠慮なくお申出で下さい。

○入会のおすすめ

本会は会則にもありますように、遺族であって、会費を納めた者だけを会員として登録し〃環礁〃をお届けしております。

〃環礁〃は通常16頁、年2回（1月と7月）発行し会の行事等の御案内や会員の声をのせております。

マーシャル諸島、ギルバート諸島の戦歿者のご親族の方ならどなたでも会員になることができますのでお知り合いにお話下さい。会費は会員一人につき一年分二千円です。入会金は要りません。入会御希望のむきは当会本部まで御一報下さい。

本部
〒103 東京都中央区日本橋人形町
一―八―二（泉商事ビル）
マーシャル方面遺族会
電話 〇三―六六一―八七六〇番
FAX 〇三―六六一―六二四一